

ては、神意即一切也。神意の實現を離れて、文明の理想を言ひ、眞善美の向上を言ふは、彼れに於いて畢竟空也。(少しく餘談に涉り候へども、小生は從來少しく思ふ所有之、トルストイの宗教上の著書を一切手にいたせし事なかりしが、頃者その有名なる『わが懺悔』を一讀いたし候て、その煩悶の歷程、及び見神の實驗に關する趣きの、その内容の淺深を別といたして、幾んど全然小生のと符合するものあるに一驚を喫し居り候次第に候。)

四

「吾等が信仰は此くの如き超越的、神祕的意義に解するを要せず、寧ろ更に實際的に且つ現實的に之れを觀、之れを立てて以て人生生活の根本主義となさんとす」と宣へる貴下

の言に徴すれば或は處る、貴下は所謂信仰の境より全く神祕を撥無せんとし給ふにあらざる乎を。假し、さまでに候はずとも、神祕は貴下の所謂生活主義としての信仰には何等の活關係もなしと觀じ給へるにはあらざる乎。全く卑見と違へり。神祕なき信仰は空名に候。神祕は迷信にあらず。一種何等かの超越的、神祕力の充實を外にして、復た信仰生活てふものは候はず。もとより貴言の如く、信仰は生活上の實際問題を解釋し指導すべきものに候べく、隨うてそが社會人生と活交渉を有すべきは言ふ迄もなく候へども、是くの如き信仰上の活力が、其の源泉を神祕的方面に有すると、取りも直さず宗教的信仰てふものの唯一特徴に候はずや。神祕一味の甘露混々として天地の奥より流れ

出でて人生の大野に灌ぐ、これ信仰に候べし。神祕の活源頭より挹み來たらずして、生命の水を言ふは、斷じて信仰者の態度にあらずとこそ存候へ。或は虞る、貴下の信仰即生活主義は、やがて一種の倫理主義の異名にあらざる乎を。げに貴下に、自我即大我の語ことばもあり。されど此か一種の哲理的凡神觀が、貴下の信仰生活に點火する活ける神祕力たるには、尙ほ何となく若干の閒隔有之候やうにも存ぜられ候が如何に。

貴下はかく、信仰を解して生活主義となし、而してこの生活主義のために健闘向上する所に人生生存の唯一の意義ありと觀じ給ふ。思想極めて剛健の調を帯びて、そゞろにフイヒテの哲學的精神を想ひいださしむるものあり。更

に貴下がこの生活主義の内容を説きて、眞善美の發現即ち文明の理想にありと宣へるに讀み到り候ては、何となく又グロリーン一派の本我實現説や、又は完成説の倫理思想、乃至は歴史説ヒストリスム一派の倫理思想などに聯想するを禁じがたく候ひき。

眞善美といひ、文明の理想と申し、げに美しくしき言葉に候べし、但だし、此かる美しくしき言葉も、最早今日の小生をして、復た心の奥の奥より、踊躍奮起活動、向上せしむる偉力の源たらざるを如何にいたし候べき。われは必ずしも昨きのうの戀のうつろへるをも悲しみ候まじ、變はりなき眞まことの戀を得たる今日の喜びの候へば也。今日の小生に窮極の安心と生命とを與へ候ものは、抽象の愛にも候はず、眞善美にも候は

ず、唯だ神也。神ありて愛は耀き、神ありて眞善美は抽象の夢たらずとこそ存候へ。

五

是くの如き向上健闘の實際的生活主義を掲げて信仰の意味を解し給ふ貴下が、所謂開悟獲信の刹那に伴ふ踊躍歡喜の心乃至は不斷の信仰生活に伴ふ歸依信樂とも申すべき一種温かなる法悦の心状態に重きを置き給はざる、これはた當然に候べし。これらの事も、所詮は人々の實驗上の沙汰にて候へば、他の實驗を強ふる譯には參らず候はんが、唯だ小生一己に取り候ては法喜もしは法悦は信仰の主觀的異名と申してもよきほどの實驗的意義を有し居り候。勿論見神の刹那に於けるやうなる大歡喜は、到底不斷に相

續するものには候はねども、一たび神に接したる法の悦びは、吾人が信後の生活を流るゝ一種不斷の根調をなして、淡けれども勁く、朧ろげなれども深く、かくて復び失墜消散するとはあるまじくと存候。若しかゝる法悦が全く散り失せ候やうの事の候はん乎、是れ未だ眞に神を攫まざるが故、未だ信仰が吾人の眞實の力とならざるが故と申候外は無之候。法悦にもその折々の弛張は候べし、我等劣機の凡夫に於いて殊に然り。但だ如何なる蹉跎失意の時にも、尙ほ朧ろげなる神の慈眼の涙と輝きて、吾等を慰め疆うする世に類ひなき力草となり候ものは、唯だこの法悦には候はじ乎。小生は幾んど法悦なき信仰てふものを想像する能はず候。法悦は信仰の唯一要件に候はずとも、そが不離

同伴の恩寵と存候。あらず、法悦は主觀的に見たる不斷の見神也。是れを以て、かの消えやすき一時的感情の發作と同視するが如きものあらば、そは大謬の見に候べし。刹那光耀の大歡喜の實驗上の事實なると共に、安心相續の法悦も、亦否みがたき實驗上の事實に候はずや。古人亦、法喜を以て妻となすと申しき。法悦なき信仰生活は、如何に冷やかなる空洞を孕み候ぞ。あはれ冀くは、貴下が健闘主義てふ雄々しき信仰の丈夫兒に、法悦てふ信樂のこゝろ一筋に優さしき久遠の花妻を打添はせてあらせかし。これ小生衷心の願ひにて候也。

六

更に貴下が他力説を黜けて純乎たる自力説に立脚した

まへるは、貴下前來の論より推して透徹の見と評すべし。貴下は人生生存の意義は自悟自覺の外なしと宣ふ。然り、人生の懷疑煩悶は自ら慘ましき血涙を絞りつくして之れを解決するの外は候まじく、小著『病閒録』は全くこの意味に於ける自覺の血痕史とも申すべし。半夜聲を擧げて天地の神に訴ふれども、何等の感應も來たらざりし當時の寂寞無限は、今想ひ出だし候てだに、尙ほ悚然たるばかり。かかる懷疑煩悶そのものが既に神の慈悲恩寵なりとは、神を見てこそ悟り候ひつれ、未だ神を見ざるの當時、いかでさる濫かき一念の慰め草に頼る餘裕の候べき、憶ひいづる苦悶の恐ろしさ、よくも自ら戦ひに堪へけるかなと、坐るに神恩加護の厚きを感謝する今日の小生は、當年の小生に候はず。

今日の小生は、神の照護の一日ひとひに生くるの身にて候也。以爲へらく、我等が一呼一吸、悉く神威力の加被ならぬはあらずと。小生の心は破れ候、碎け候、而して新生命はあつから涌き出で候。他力荷恩の一念は、今や小生が日ごと夜ごとの糧と相成り申候。貴下は他力觀を難じて、自暴自棄に陥るも神佛の心、自殺他殺も亦神佛の意志と相成云々と言ひ給へど、眞に神佛の意志を體したる者は容易にかゝる罪を復びするの人ならざるの理を思ひ給へ。貴下は又、他が慈悲の袂に隠れて向上心の起るべき筈は無之と申され候へども、寧ろ換言して、神の大愛に觸れてこそ、眞個偉大なる向上心は起こらめと申すの、更に一段切實なるものあるにあらざる乎。何人も自爲、自用、自力に拘からふ一念の羈きを

さらりと投げ棄てざるを得ざる時機、早晚到來すべし。吾れ爲すにあらずして、わが衷に生きます神の愛の、自然法爾に打發ひらきて浩々たる積極的活動となる、是れ豈信仰の極致には候はずや。こゝには他律と自律と合して一たり。願はくは、我等をして大愚の心に歸つて神の大愛に生きしめよ。たゞ謂ふ所世の絶對他力觀の陥り易き弊は、個性もしくは、個人格を幾んど無視し、若しは輕視し、等閑視するの傾きある一點に候べし。この點に於いて、小生は貴下と幾んど同調同感の見を持し居り候。げにも神意に對する絶對的服従は、信仰の極致に候べし。南無阿彌陀佛の一念を外にして、信仰の中心之れ有べしとも覺え候はず。但だし謂ふ所の南無阿彌陀佛、即ち神意に對する絶對の歸命服従は、

有、個人格者の、自覺的服従なるべきとを記せざるべからず候。我等が神に對する服従は奴隸的にあらず、器械的にあらず。我等の個人格は實在海の無意義なる一波浪にあらず、是くの如きは又實に神自からの欲し給ふ所に非ざる也。それ神は其の無上の尊嚴を以てして、尙ほ且つ我等が個人格を敬し給ふなり。我等小^{ちひ}さき神の僕^{しもべ}にして、尙ほ天地の大經綸に参加するの自覺を有し候にあらずや。この自覺あり、隨うて一種の自力あり、自由あり。神力攝護の信仰はかゝる意味に於ける一種の自力思想と容れがたき程、褊狹窮屈のものとしも覺え候はず。詮じ來たれば、人生一切の事、神人一團の融會力の發現とや申すべき。こゝに純他力と言はずして、特に融會^{いっかい}かてふ一新語を下だし候ひしは、唯だ神力遍在裡に於ける我等個人格の自覺に、不磨の一位地を與へんと欲する又與へざるを得ざる小生日ごろの實驗の一片を詮表^{いんぎょう}さんとして候。個性の存在に重大の意義を置き給へる貴下また、十分この意を諒し給ふべしと信ず。

七

貴下が真情の御書に接して、覺えず絮説の罪を得たり。或は貴下が信仰觀の他の一面を描かんとして、極端の見に聘せたるふしも候ひしなるべし。要するに、忌憚なく申し候へば、貴下が所謂生活主義の信仰には、尙ほ優に一撇開の餘地あるべくやう存ぜられ候。貴下が眞摯雄健なる自力的信仰觀に、更に全鱗皆動くの光彩を賦し候ものは、果たして何に候ぞ。御教示に接するを得ば幸甚と存候。不盡。

(明治三十九年四月)

書 牘

御書うれしく幾度も繰返して拜誦、唯と言ひがたき喜ばしさと慕はしさと感謝とをもて心躍り申候。御封入の春蘭、清香さと迸りて書齋の裡、志ばしは神の宮居の凜乎たる心地いたし候。委しき御現状承り我身の上の事のやうに思はれ候てまみくと讀み入申候。いつもながら野趣野情に満ちたる御文は、年中觀念の小室に閉ぢ籠もれる小生に取りてこよなき救に候。大いなる自然の中にして、心往くばかり趣味の太源と道交し給へる兄の御境遇は羨ましくも候かな。まゝならぬ身世、色々と御感慨も候べし、小文人の虚名云々、御同感に候、何人も少しく眞面目に世に立た

んと思ふ者は、幾多の煩悶と悟達とを要し候べく、唯だ常流の士は感慨餘りありて一躍蟬蛻の決志なく、一生心なくも目に見えぬ習慣の繩に縛られて終はる也、凡夫の悲しさとは申せ、我等の天に心すべき事に候はずや。嗚呼我儕、無くてならぬものは唯だ一つ、此の一つをだに眞實に攫み候はば、一切を糞土の如くに抛つ大勇猛心、大安心、大歡喜を得べく候。小生は御手紙を得候ごとに、いつも兄が御道心の向上を嬉れしく存候、兄がこの一味健實なる自覺の發展は、やがて小生が自覺の發展に候、誰れかこの一味同躰の自覺のよろこびを隔離するものあらんや、我儕は今や神に囚れる聖なる友垣を結び候也。

小生昨暮よりまばらしく神經衰弱に惱まされ、終日昏々と

して沈睡に陥り候やうの事も候ひしが、一週ばかり前より元氣恢復、この分ならば、遠からず例の車上行樂の折も來たるべくと存居候、御心にかげさせられまじく候。暫く遠ざかり居りしスピノーザ、此頃亦復た親しき枕頭の友と相成候、小生はスピノーザの哲學思想や、其の學究式なる文躰などには服しかね候處も有之候へども、その堪へがたき病苦の中にありながら、一切の虛名煩惱を脱して、一念ひとへに永劫の眞理にあこがれたる神に酔へるの生活は、小生をしてあらゆる隔ての籬を徹して彼れを抱かしめ申候。げに世に彼ればかり冷頭熱意の人もあるまじく、彼れが大いなる思想の海は、一碧萬類を涵すの静けさを打湛へながら、其の千尋の底には、思慕限りなき熱情の潮、滾々として涌き且

つ流れ居候、小生は彼れに對し候ごとに、其の個人的といひ、超世間的といひ、甚しきは利己的とさへ言はるゝ世の一種の批難を思ふの遑無之候。

小生に二歳餘りになる姪あり、可愛らしい娘に候、大抵隔日に小生の宅へまゐり候、小生の無邪氣な遊び友達にて候、妻なく子なき小生は、この小ひさき教師より多くを學び申候。御一笑。

日本の詩人中、最も慕はしきは芭蕉翁に候、彼れはどうしても尋常一様の自然詩人にては無之、深く自然の源に神契道交せし高調有之候やう被存候。彼れが屢々人間に自然に打灑ぎし涙は、神々しき法涙とも申すべき所あり、而して又彼れが解脱は枯禪流の解脱には無之やうに候。一俳人

と言ふ勿れ、今日の文壇、一人の彼れが如き醇乎たる詩人的人格を有し候ものありや、彼れが如き慈愛の徳望高き詩人ありや、彼れが如き法味、法涙を湛へたる清高の詩人ありや、小生はかねてより一度芭蕉の面目を心往くばかりに描いて見度存居候。兄よ、兄の今、日夕親しみ給ふ所、即ち芭蕉の旅魂の死に至るまでかけ廻りし所ならずや、兄は兄が自然に對する趣味ある清新の筆を以て、芭蕉が曾て到りし、又到らんとして到り得ざりし高き標的に、兄自らの特殊の形式を以て、進み給はむとは思さずや。草々。

(明治三十九年四月)

枕頭の記

(一)

憶ふ、予は身體の尙ほ健全なりし時より、長夜の悪夢に襲はるゝが如く、屢々死を恐るゝの念に襲はれたりしを、予は眞個の永生は意義ある生活を送るにあるを見、而して謂ふところ意義ある生活は神ありて始めて存し得べきものなるを見たり。されば予が面まへりに神を見、神に接はらんと欲せし最大の動機は、言ふ迄もなく依りて以て人生生存の根本の原理を攫み、依りて以て不動の信念を樹立せんの一念にありし也。一切の形式、因襲、傳説を外にして、眞個確實なる見神の心證を握らずんば、予は一日も安んじて生活を

續くる能はざるが如くに感じたる也。予は神なき所人生なしと感じたる也。文明も、眞善美も、向上の努力も、道德の完成も、人道の發展も、神なくんばすべて空の空也と感じたる也。見神乎、然らずんば皆空都滅乎、一切を唯だこの一問の解釋に究竟し來たりて、復た他に出づるの道を知らざりける也。予が見神の動機は、謂ふ所恍惚忘我の淨樂を得んが爲めにもあらず、そは寧ろ獲信の一結果、一恩寵なりき、動機にはあらざりき。閑人不急の好奇の念に驅られたるが故にもあらず、將た又單に神祕を神祕として之れに耽溺せんが爲めにもあらず、そは最嚴肅なる道德的要求より發し來たれる、謂はゞ命懸いのちがけの大事なりし也。

さはれ、予が見神の要求には、尙ほ他に一個重要なる動機

ありし也。即ち依りて以て神人基督に對する一層正しき理解と一層深き同情とを贏得せんことにありき。予は曾て如何に基督を觀じたる乎。今は如何に觀じつゝある乎、或は僭越の譏りもあらんが、予は今この事に關する予が内生活史の一ふしを略叙して、聊か讀者の觀省に資する所あらんと欲する也。

(三)

四福音書に見はれたる基督の人格に對する予の見解もしくは態度は、これまで大凡そ三段の變遷を劃し來たれるが如し。第一は何等の自覺も定見もなくして、唯だ幼稚なる素直ごゝろの一筋に、傳説そのまゝの基督を信受したりし時代。第二は基督の人格に於ける神祕的、超自然的方面

を一切除非抽象し去りて唯だ其の倫理的、實踐的、方面のみを採つて以て行爲の範となせし時代。第三は兎も角も自覺的に一種の理解と同情とを以て基督の完人を觀じ得たりとなせるの時代。是れ也。第一を基督に對する無差別、的、盲、信、時、代と謂ふべくば、第二を二、元、的、懷、疑、時、代、第三を調、和、的、正、信、時、代、若し老か言ふとを允さばとも謂ふべからむ。予は十四五歳の頃、郷里なる組合派の一基督教會に籍を置き、てより來、^{このかた}二十歳前後の頃まで、謂ふ所正統的基督教の一信者たりき。今より當時予が基督教に入りたる動機若しくは理由てふものを回想するに、そは基督教そのものに對する何等の正確なる理解に基づきたるにあらずして、寧ろ専ら其が文明國の宗教たること、其が何とはなく道德的

調子の高き一ふしを有したりしこと、乃至は之れを説き傳ふるもの思想と品性と態度とが迥かに從來の僧侶神官等に立ち優れて立派なるものありしこと、等の點に存したりしが如し。當時未だ中學の科程をも履まざりし一小童如何で基督教の何たるを解し得んや、唯だかゝる取りとめもなき漠然たる外形的異彩に、幼なごゝろの何とはなく心惹かれて、この新來の宗教を一筋に慕はしとのみ思ひなりぬ。かくて一たび基督教界に入りてよりは、予は自ら信じて基督教の無二の忠臣となりぬ。予は教會の傳ふる所、牧師の説く所の一切をさながらに信受し、懷抱し、長養して、復た些の疑ふ所惑ふ所もなかりき。後に至りて一々理性の躓きの石となりし教理、信條、儀式も、當時の予の意識には何

等の障礙ともならず、流るゝ水の跡をもつけず、いと滑らかにぞ透過したりける。當年の予は、謂はゞ一個の被催眠者の如くに、殆んど全く基督教てふ大魔力に吸ひ込まれたるの觀ありし也。予はこの大魔力の支配下に、祈禱をも捧げたり、讚美歌をも歌へり、晚餐をも守れり、奇蹟をも信じたり、乃至贖罪の秘義をも、化身の幽旨をも、復活説をも、三位の神をも、インスピレーション説、聖書無謬説をも、舊約の六日創造説をも、人類墮落説をも、その他教會所傳の一切をば、何等の批議、何等の考覈もなく、一氣に嚙下したりし也。哲學上、宗教上、何等の素養眼識なかりしものが、かゝる絶對的他律信に支配せらるゝ、思へば異しむには足らざりけり。予が當時の理性は、尙ほ幼稚なる信仰の搖籃の中に安らかに眠

り居たりし也。信仰と理性、客観と主観とは、謂はゞ幼げに相懷抱して、復た何等の矛盾的意識をも惹き起こさざりける也。されど、是くの如き他律信、豈久しきを得んや、予が當時の信仰は、譬ふれば猶ほ靈魂の窓に外より貼付せられたる怪しげなる色紙の如き乎。われはこの靈魂の色窓を通して覺束なくも天地人生を打眺めつゝ、六年が程を過ぎたり。されど、外より貼付せられたるものはやがて又剝落せられ破壊せられざるを得ず。果たせるかな、數年ならずして懷疑の雨、煩悶の風は、齟齬として横ざまにわが靈魂の色窓を撲ち來たりぬ。

(三)

是くの如き信仰の危機は、何人も概ね一度は經過すべき

所ならんが、予も亦一時全く懷疑不信の狂瀾に捲き込まれるに至りぬ。理性が自家獨立の要求を漸く意識し來たりしにつれて、樂しかりし疇昔の信仰も、またやう／＼にして破れ易き空虚の夢を育むに至れるぞ是非なき。かくて暫くは持續せりし予が惰力的信仰も、ダーウインの進化論、ヒュームの懷疑説、カントの批評哲學、其の他予が當時脩得せる多少の哲學的造詣の爲めに、あはれ最後の一撃を受けたり。予の理性は、其の傲慢なる智力的自大の態度に立つて、一切の信仰を無根據の迷信と排し去れり。如何なるが正信にして如何なるが迷信なる乎、何をか背理といひ何をか超理といふ、合理的信仰とは何を意味する乎、抑々亦信仰的意識に占むる理性本來の位置如何等の問題につきては當

時何等の明解をも下すことなく、苟も予が未熟幼稚なる理性の力もて解決しがたき事、若しは理性に何等かの衝突^{シヨツク}を與ふるものにだにあれば、予は輕佻至極にも、徑ちに之れを迷信又は無根據として拂拭し去りたる也。曩昔の盲信は翻りて今日の懷疑となりぬ。曩に信仰に過與せられたるもの、今は反つて過奪せられんとす。予が理性は越權にも其の暴慢なる破壊力^{はしさいき}を縦にして、嘗に聖書の奇蹟を否み、復活を拒めるのみならず、是れ或は可也、更に神、其の者の實在乃至は神人父子の神祕的意識をさへも、一併に掃ひ去りたり。當時われ豈神祕と迷信との區別を正解し得んや、予は神祕をやがて迷信と同視し去りぬ。予が後に基督の信仰及び人格の唯一の秘訣にして、又實に一切の偉大なる宗教

的意識の中心動力とまで、至高唱し重視するに至りたる件の神人父子の自覺をだに、當時は一個の迷信もしくは無意義、不可解として、輕く抛ち去つて顧みざりし也。是くの如くにして予の信仰は蕩然として流れたり。残れるは何物ぞ。曰はく、倫理のみ、道德のみ、乃至は正義人道てふ漠然たる感情、抽象的なる理想のみ。基督は單に一個の偉大なる道德的天才となりぬ、聖書は單に一卷の修身書、道德經となりぬ。予は孔子、ソクラテースに對すると同じ眼をもて基督を視論語、エビクテートスを読むと同じ心をもて四福音書を読みぬ。而して自ら以爲へらく、是れ最も健全にして合理的なる態度也と。當時私かに自ら説をなして以爲へらく、神は基督教の説くが如くに人格的存在者として客觀的に

實在するものにあらず、世に若し神てふものありとせば、それは唯だ吾人の主觀に潜在する道德的理想としての「真我」なるべきのみ、人生の意義は、唯だこの形式的原理として吾人の衷に潜在する道德的理想をば歩々無限に填充しゆきて之れを客觀的現實のものとなす向上の活動その事を外にしてはあらずと、是くの如き純乎たる道學の見地に立てる當時の予が、聖書に一種の格言集以上の意義を附する能はざりしは又當然の理なりしのみ。予は當時尙ほ折々一種の興味を保持して四福音書を繙きたり、されど記せよ、予が當時の四福音書は、その神祕的、超自然的、靈覺的、文字の悉く、理性の暴殄に蝕まれて、隨處斑々たる空白を遺し留めたものなりしとを。何等荒涼たる光景なりしぞ。

(四)

されど是くの如き智力的、道德的、自大の夢は永くは續かざりき。爾來三四年の星霜を送迎せる間、漸くにして予が是れまで固く執つて合理也健全也となせる學究的倫理生活にも一種言ひ盡くし難き寂寞の深く、潜めるを感じ初めたり。釋かりし往時の他律的信仰は一去して復た還らず、ざるを奇しくもわが心は屢々平和なりし當年の信仰生活に一種追憶の涙を墮としぬ。嗚呼、是れ何が故ぞ。唯だ記すなくてぞ人の、更に戀ひしき思ひこそ、予が當時の内消息を描きたる唯一恰好の言葉なりしを。予は顧みて予が現在の地位を自覺しぬ、而して戰慄しぬ、予は天地の間に竦然として、復た祈るべく訴ふべき、温情無限の神を有せざ

るにあらざるや。予が理性は曩に是くの如き神を迷信の塊として一擲し去りたる也、而かも予が中心の至情には、是くの如き神にあらざれば所詮填め盡くす能はざる深奥無限の空白あるを如何にせんや、神なき世界と人生とは窮極の意義と價值となき大いなる荒塚あらかなるを如何にせんや。予れ自覺なかりし昨は、曾て一たび如是の神を有したりき。而して自覺あるの今日は、更にく痛切に如是の神を慕ひ求めざるを得ざるにあらざるや。予は言ひ難き孤獨の歎きを以て、曠昔の神を喚び索めたり。されど神は死したり。如何にして之れを復活せしむべき。

この差し迫りたる眞面目なる問題に觸接して、予の傲慢なる理性は、漸く謙讓の態度を取り來たり、かくて謂ふ所宗

教的信仰の、全くは迷信不合理のものにあらざるべきに想著し、而して虚心にして信仰の合理的根據を分析研究せんとするに至りぬ。當時予が研究の精透を以て目すべからざる、固より言ふまでもなし、さはれ兎にも角にも、予は當時信仰對理性の問題に關して、疎雑ながら大略下の如き一種の結論を下だし得たりし也。曰はく、謂ふ所宗教的信仰てふ意識状態を以て、無根據、不合理なる迷信の沙汰なりとは見るべからず。信仰意識には純理性の見地のみを以てしては到底批評し盡くす能はざる或一種の直覺的、具象的、神祕的要素あり。信仰の對象たるべき神は、概念として理解すべきものならずして、寧ろ主として心情をもて觸れ味ふべく、全人全靈を以て直觀自證すべきものたるなり、而して

是くの如き意識直證の事實としての信仰圈内には、純理性をして軽くしく立ち入らしむるを允るさずと。更に加へて以爲へらく、若しそれ理性の意義を單に推論的純理性と解せず、更に之れを解して、吾人に事實そのもの理想そのものを付與する直覺的、立法的理性の義となさんか、是くの如き意味にての理性は、是れ吾人に信仰を與へ、神を與へこそすれ、斷じて之れを否定し、空了する者にあらざる也。されば要するに、信仰には純理性を以て時に廓清すべき不合理の分子の混在するとあると共に、復た到底純理性を以てしては批評し去り衝破し盡くすと能はざる深奥不可抜の根據を人心の神秘性に託すると明かなりと。是くの如くして予は信仰をば理性の僭上無法なる侵蝕より擁護し得たりと信じたり。

予は兎も角も信仰の合理性を證し得たり。されど悲しいかな、予は未だ信仰そのものを獲る能はざりし也。聖寵は、老つらはれたり、されどこゝに安置し奉るべき神體は未だ發見せられざるなり。是に於いてか、予が研究思索の態度は、急轉直下して、自ら抑遏する能はざる思慕の聲となり、あこがれの情となりぬ。而して一面に於いて、予が肉體上の病は、益々この心情の要求を痛切ならしめたり。予は最早回顧する能はず、踟躕する能はず、直ちに予が心情を以て宇宙の心情に薄りぬ。予が寂寞たる靈魂は、渺茫無邊の空に、唯だ頼む一つの木蔭を捜し索めたり。わが一念のあこがれ心は、天涯に傷つき、地角に踏れ、或時は美的空想の花野

に欺かれ、或時は我れを壓する、存在そのもの事實に戦たたかひ
 悸おそきつゝ、かくて疲れ果てたる翼を歛めて再び我れに還り
 來ぬ、而してそこに忽然として内在神祕の聲を聞きぬ、曰は
 く「我れは爾の索むる爾の爾也」と。爾時大歡喜は潮と涌き
 ぬ。されど悲しいかな、わが聽き得たる聲は、尙ほ薄明の心
 あるを免れざりき。われは再び起つて神を喚び索めたり、
 而して再び神在いましぬの聲に活きたり、かくて歡喜と、失望と、
 光明と闇黒と、幾その心上の波瀾を閲しつくして、竟に一朝
 最も沈痛且つ明確なる意識直證の聲を聽取し得たる也。
 見よ、わが神はもはや理心模索の灰色の神にあらずして、生
 命の流れ活潑なる綠色の神にるにあらずや、わが見たる神
 は、世俗謂ふ所の夢枕に立つ錯視幻覺の神にあらず、わが見

たる神は、かのモーゼが見得べしとせる憤怒嫉妬の煩惱神
 にあらず、ミカヤの描ける諸天の萬軍を左右に打従へたる
 神にあらず、將たダニエルが所謂白衣白髮の神にもあらず、
 エゼキルが想像せる火の神にもあらず。皆な非也。予の
 見たる神は、直ちに靈を以て靈に觸れたる靈の神也。然ら
 ば予が見神に何等の客觀的確實性あるかといふに、そは見
 神てふ事實そのものを外にしてあらざる也、否、ある能はざ
 る也。眞理は眞理自らを燭らして復た他に須つ所あらず
 見神の客觀的確實性、亦復た是くの如し。そは予が意識の
 直接に自證する所、即ち所謂冷暖自知の境なる也。これら
 の事、曾て屢々記する所ありたれば、今また必ずしも贅せじ、
 唯だ今日よりして冷靜に予が當時に於ける見神の刹那の

光景(殊に『病閒録』に第三の場合として記したるもの)を回想するに、それは自意識の擴大といひ、高擧といひ、若しくは恍惚といふが如き一類の言葉を以てしては到底説き盡くし難き或物、即ち寧ろ見神感ともいひつべき或特別なる感センサの新たに付與せられて、一種未踏の新光景の啓示せられたりと言ふの、更に適切に予が意識経験の一分を説き得たるを感ぜざるを得ざる也。思ふに是くの如きは、この類の神祕的經驗を有する人の心に響くべき最確實の意識的事實にはあらざる乎。

(五)

さはれ、予が斯くも熱心に見神の一事に心傾けたる所以は、他に動機あり。即ち前にも言へる如く、予が一面基督の

人格に對する眞の理解と洞察と同情とを得んととの要求是れなり。予は曩に基督を見ること、徹上徹下、倫理的、常識的となり、基督を以て一個絶倫の道德的天才となし、聖書を以て一個卓絶なる修身書となし、是れを以て正確無謬の見と信じたりしが、予が神に對する熱烈なる思慕の情の、新に起こり來たれると共に、基督に對するかゝる枯淡なる常識的、倫理の見解の、竟に支ふべからざる謬見なるを悟るに至りぬ。基督の道德的偉大は、永しへに世界の驚歎欽慕なりといへども、單に倫理的にのみ見たる基督が予を動かすの力は、曾て因襲的、奇蹟的、若しくは迷信的に見たりし予が舊時の基督よりもいとく薄弱なるにあらずや。予が幼時に見たる基督は、謂はゞ活人形同様の、固より擬カタひものにてあ

りけれど、尙ほまかすがに血肉あるの觀を具へて、咄々我れに迫るの權威を有したりしが、今見る所の基督は、謂はゞ藁人形の枯瘦にして些の生色だになし。予は悟りぬ、予が曩に奇怪とし、迷信とし若しくは茫漠、曖昧、不稽として抛ち棄てたりし一味の神祕的、超自然的、靈覺的方面こそ、正さしく基督の人格と事業との依つて迸り出てたる不盡の活源泉にして、この一方面を除外して、復た基督を正解すべき眞個の秘鑰あることなしと。此く思ひ續くると共に、從來餘りに意を留めざりし基督の神祕的自覺即ちその常に親しく衷なる神と交はりて游泳自在を極めたりし神子靈交の自覺が、今更の如くに新光輝ある重大の意義を有するものとなりて予が心を撲ち來たりぬ。以爲へらく、基督の絶倫な

る人格と事業とは、其の主原因をこの無類特絶なる神祕的靈交の一自覺に有したりしにあらざる乎。彼れが生涯を通じて、人の子は枕する所だになしと言へる世にも慘ましき不斷の健闘生活の裏面には、又神と偕に在る個の一種の平靜悠揚なる神祕的生活の、不斷に流るゝありて、彼れは常にこの平靜神祕なる緑りの汀灣みぎはに息ひ、而して又こゝに其の絶代の力を得來たれるにはあらざりし乎。貴きかな彼れが神祕的一面の自覺や。我等は曾て基督の道德的偉大を觀て、而かも其の秘訣の源泉たるこの平靜にして崇高なる神祕的靈交の一面を見落としたるにあらざる乎、否之れを見らざる乎。我等が基督のこの一面を觀ること、他の尋常一

様事の如くに、幾んど何心なく其の傳説そのまゝに受け入れ居らざりし乎、眞に未だ新鮮なる意識と深奥なる洞察とを以て、まみくと身に體してこの一事を味はざりしにあらざる乎、而して眞に自から味はざるを既に味ひたるが如くに我れと極め込み居らざりし乎、少くとも予自からはこの悲しむべき大誤謬に陥れるものなるを發見したり、而して自ら以爲へらく、眞に基督を正解せんとせば、其の神人父子の神祕的靈交の自覺に深く分け入りて、これを我有とする游泳親切の功夫なかるべからず。我みづから直接に基督の見たる神を見、我みづから直接に基督の游泳自在せる神子の自覺を握らざるべからずと。予は基督の人格を信じたり。それ他の人格を信ずるは其の一切を信ずる也。

予は基督の人格と意識とを通して其の神を信じ、其の神人靈交の自覺を信じたりき。されど予は尙ほ不幸にもかゝる第三者の媒に籍るを足れりとせずして、端的に吾が衷なる光に於いて神と相見んとを要めたる也。これ不遜か、冒瀆か、將た聖書の歴史的權威を無みしたるの擧なりしか、すべて知らず、當時予は唯だこの己みがたき一個の要求に驅られてこゝに至らざるを得ざるを知れるのみ。然るに予が祈求は空しからず、予は親しくわが衷なる光に於いて天地の大靈に接し而してこの心證の直接なる一證果として、今更の如くまみくと、勁く且つ明瞭に我等衆生は皆神の子也てふ先覺所證の一自覺を握り得たる也。而してこの神子の自覺、これ即ち我儕が不壞の生命の源にして、世

の一切に勝ち得て餘りあるの力なるが故に、我れ之れを神に感謝す。予が當時の證悟の内容の機根と共に淺きは言ふまでもなし、但だ予の如き煩惱具足の身を以てして、尙ほ且つ神子の自覺に與るを得て、始めて我等人類が天地の間に在る尊嚴無上の意義を悟り、而して又翻りて一切の人生問題、道德問題、社會問題等を解釋すべき最根本的原理の、一に繋りてこゝに存することを悟りたり。而して是くの如くにして又自然は新たに輝き、同胞は皆第二の我となりぬ。(然らば神子の自覺は、如何なる意味、如何なる方法に於いて、件の諸問題を解釋すべき秘鑰たる乎はおのづから次ぎに來たるべき提案なるが、これ等の實際問題に關しては、自ら揣らず、徐ろに他日を期して卑見を開陳すべし。)

かくて翻りて基督を觀る、彼れは最早疇昔の如く歪曲せられず、陰蔽せられず、抽象せられず、分裂せられず、直ちに其の神人の全面目、全人格を露呈し來りて、光顔巍巍、予が前に輝き立てるにあらずや。曩に傳說的、倫理的、高處より、その驚くべき不可解の偉大を以て當面に予を壓したりし基督は、今や崇高無限の威を、その小兒の如き溫顔怡容につゝみつゝ、親しく予の手を取つて、予の病を負ひ、予の「悲みを荷ひ」つゝ歩み、給ふにあらずや。予は復び聖書を繙きたり。而して見よ、曩に無殘にも自大の理性に蝕せられたる神祕靈覺の文字の或るものは、予は或るものといふ、予は尙ほ或種類の奇蹟や肉身の復活等につきて一種の蹟シグナきを有すれば也、更に新たなる意義を有する金煌々たる文字となりて一

一紙上に立てるの概あるにあらずや。そは單なる道德經といふ以上、永遠の神の言葉を傳ふる「生命いのちの書よみ」と化し來たれるにあらずや。予は今にして親しく、基督が「我れを見しものは父を見しなり」といひ、父の外に子を知るものなく、子の外に父を知るものなし」といひ、若しは「我れ父に居り、父我れに居る」といふ如き一種特絶の神祕的自覺の消息に分け入るとを得て、已みがたき同じ心の響きの、一々鮮かに我れに應符するものあるを覺えたり。嗚呼基督我れを去ると遠からず、基督は邇く我が一念裡にあり。我が衷なる人は基督を照らし、基督は翻りて又我衷なる人を照らしぬ。是くの如くにして基督と聖書とは予が爲めに更に深奥なる意義光明を著けて復活し來たりぬ、而して予も亦活きたり。

(六)

予は以下筆を洗うて、更に審かに予が見神の内容、意義、價值、影響、及び方法等につきて陳述し、且つ之れに關する世の誤解をも辯ずる所あらんと欲せしが、思ふ所ありて一切を沈黙に付することとしぬ。讀者或はこれを諒とせん乎。予は黙しぬ、されど活ける神は、その偉大なる沈黙を以て、永遠より永遠に語り給ふべき也。

(明治三十九年六月)

「靈的見神の意義及び方法」の一篇参照を乞ふ。

一燈録

覺者に對する信

大いなる覺者は、大河の百川を集めて海に朝宗するが如く、群生を率ゐて至高者に趨向す。是れ實に心靈界の一大事實にあらずや。

覺者を信ずるものは幸なるかな。覺者を信ずるものは覺者その人の偉大を己れの偉大となすを得なければなり。彼等は基督の如く神を見るときを得ずとも悲しまず、彼等は基督を信ずることによりて、基督の神を己れの有となすを得なければなり。彼等は釋迦の如く正覺を取るときを

得ずとも傷まず。彼等は釋迦を信ずることによりて、釋迦の正覺を己れの有となすを得なければなり。

信に二重の偉大あり。信ずるには非常の謙虛を要し、洞觀を要し、勇氣を要す。これ第一の偉大也。信ずるものは、信その者によりて覺者を得、神を得、永生を得、これ第二の偉大也。

人目枯れくゝなる葎が宿にも、天上の月光隈なくさし入り、眼に一丁字なき田夫野人にも、久遠の法輪、雷の如く轉ず。彼等は世の所謂聰明才智を頼まず。さらば何をか恃む、彼等に唯だ一念覺者を信ずるの信あり、彼れ等はこの一信念を抱きて、則ち神に之き、神子の自覺に之く。

それ信ずる者のいと小ひさきは、信ぜざる者のいと大い

なるよりも大いなり。彼等は皆恩寵の子也、以て天地の間に潤歩すべし。

ニールトンや、カントや、沙翁や、豊太閤や、彼等星の如き幾多の偉人は、おの／＼その特有の天才、特有の偉大を挾んで、我等を壓し來たる。我等が地上寸を抽くの青は、彼等が萬古參天の木蔭に庇はれて、見る影もなく朽葉の底に埋もれ果てんとす。人生こゝに苦痛煩悶なきを得んや。然れども哲人は教へて曰はく。

“If I feel overshadowed and outdone by great neighbours, I can yet love; I still receive; and he that loves makes his own the grandeur he loves.”

何等高調の福音ぞや。俯してわが弱小を悲しまんよりは、

仰いで他の高大を包容せよ。他が如何なる高大を擁して當面に我れを壓し來たるとも、我れは尙ほ彼れを愛するとを得るなり、我れは尙ほ彼れを容るゝとを得るなり。人生こゝに涙なきにあらずといへども、是くの如くして他の偉大は、やがて我等が偉大となるなり。嗚呼何等廓然たる大公の心ぞ。

愛あり信ありて、人はまた空しく地上の塵たらず、愛あり信ありて我儕は克く自己を庸常なる自然生活、現實生活以上挺きて、永生の志らべ高き一境に聯なるを得べし。世の智者學者は、動もすれば、われとわが驕慢なる心の入江に閉ぢ籠もりて、生命の潮路、あさましう枯れ果つるならひなれど、愛あり信あるものは、無私謙讓の心常に浩然として打

開きたるが故に、神の恩の温潮、千波萬波、洋々として拍ち寄せ、流れ來たり、咽び入る。己れをさへげて歸命せよ、光明のづから脚下に涌かん、我を法に投入せよ、我よく法の王たらん。

是くの如くして世の一切の偉人覺者は、亦實に吾が靈魂の一斷片たり。覺者を信じ、偉人を納るゝものは、やがて又覺者也、偉人也。

青天に向つて開く牡丹かな

一句誦し來つて、高朗、淨潔、超邁、眞實の韻、錯落として心絃に落ち來たる。正に見る、花は直ちに滿心豊麗の思ひを囁き、空は徐ろに春容大雅の象を展べたるを。又思ふ、花に、巍

巍として彼蒼と語るの意氣あり、空に、俯して就き、泛く應ずる引接攝護の慈光あるを。而して落々たる心事を打ち出だして、天地の大靈と語る大丈夫の面目、またおのづから個中の景に映じ來たる。一句再誦して、空も徒らに高からず、花も空しく卑からず。

人格の不朽

名手入神の高調は、一々その手慣れの樂器に刻まれて、復た容易に消えじとぞ聞く。われら生まれて神子の權威に立てるもの、當におのが姿の一ふしを天地の大意識に刻むの意氣あるべき也。物質の器、尙ほ且つ感應の媒たり、まして火よりも早く屈折し、水よりも軟かに流動し、電氣、磁氣、瀕

氣の一切をして、その萬一を髣髴せしむる能はざる無限の撓揉性、擴充性、融會性を有する心靈光流の世界に於いてをや。ストアの古哲人は以爲へらく、賢者が一指頭の伸張は尙ほ能く全賢者を幸ひすと。易に曰はずや、君子其の室に居つて其の言を出だす、善なれば則ち千里の外之れに應ず、況んや其の邇きものをや、其の室に居つて其の言を出だす、不善なれば則ち千里の外之れに違ふ、況んや其の邇きものをや、(略)言行は君子の天地を動かす所以也と。吾人の一言一行は徑ちに感應の波紋を天地の人格に及ぼすと知らずや。

吾人の人格を天地の人格に刻む、之れを稱して神に連なるの生といふ。神に連なるとは神の中に我れを沒了する

の謂ひにあらずして、わが獨自一己の面目を保持して、さながらに神子一體の靈交に入るの消息をいふ。吾人の人格は春雪の波上に落つるやがて一味の實在海に歸入するが如きものにあらず。吾人の一死は、神そのものに解體し漸滅し去るの謂ひにあらずして、神の中に、神と偕に、神子としての本性を益々旺んに光揚するの謂ひなり。吾人独自の人格は、永劫無意義に歸せず、神はわれらの人格を敬重し、攝護し、發展せしめ給ふ。神は吾等最微なる一人をだに常に最高の天使群もて護らせ給ふといふにあらずや。夫れ吾等の人格は神の大愛の産む所なり。

吾人の生命は神の大生命と錯はり、吾人の人格は神の大人格と即して、道交應化の微妙のまらべ永しへに盡きざる

もの、やがて實相如實の風光にあらずや。されば吾人は永劫神にあらず、神とならず、又實に神たるを希はず、吾人衷心の願ひは、永劫神之子として、神の大生命の中に參差として生ひ茂り、永劫神と偕に天地人生の經綸に參せんと也。ここに無限の活動と謙遜と光榮とあり。

河は流れて海に入る。千里萬里、蕩として跡なし。わが所謂神に連なる永劫の生は、これと異なり、若し大海の懷に瀉ぎ出でてその回抱の甘美を十二分に味ひながら、而かも尙ほおのが姿の詐らぬ一ふしを無窮に流れ／＼て休まざる河あらば、われは之れを眞個永生の河とたへんかな。

信仰即義の解

マルチン、ルーテルが、一代法門の要義となしたる信仰即義、言ひ換ふれば、吾人は信仰によりてのみ義とせらるるてふ一提唱は、少しく宗教的經驗を有するものの、衷心唱和の聲を放つ不壞の眞理なるべし。吾等は、德行や、事業や、外形の效績によりて神に喜ばるゝの價值あるなし。吾等が自、是の一念は、神の最も嫌惡したまふ所なり。吾等が神に捧ぐるものは、人界の光譽とする德行若しくは事業にあらずして、唯だ濺ぎ盡くせぬわれらが罪障の涙のみ、悔悟のみ、懺悔のみ、感謝のみ、至心の信樂のみ、碎けたるこゝろのみ。一切の智を去り、徳を棄て、矜高自大の思ひを葬り盡くしたる赤子、天真の絶對的歸命の一念、是れ實に吾人が救を全うすべき唯一の生命の綱なり。

さはれ、信仰即義の謂ふ所信仰は、おのづから吾人の正意、善業の新動力を含むの信仰たらざるべからず、語を切にして言へば、謂ふ所信仰そのものが既に道德的、新生を意味する底の信仰たらざるべからず。随うて又如是信を獲得せる吾人は、おのづからこれ建徳の人、愛他の人たらざるべからず。口舌三昧の稱名や、外形的贖罪の信仰は、信仰の化石もしくは皮殻にして、信仰そのものにあらず。活潑なる信仰は常に道德的高調を伴ふ、そは束の間に逝きゆく情感の空花にあらずして、必ずや恆久堅實なる徳行の碩果を結ぶべきものなり。而して是くの如きは實に吾人の區々作爲を藉らざる神恩、自然の流行也、氣化也、醞釀也。徳行を兼ねざる信仰の言ふに足らざるは『雅各書』の著者既に之れを

道破せり。

是故に知んぬ、ルーテルが從來の自力的徳業主義に對して他力的信仰主義を掲げ出だしたるは、初代基督教の信仰に立ち還りて、一面よりいへば、一段高き意義に於ける純徳、業主義を提唱したるものに外ならざるを。彼れが信仰主義は、むしろ舊道德を更に内化し、淨化し、靈化したるものといふを當たれりとすべし。如是の信仰は、單に客觀的、形式的に基督の贖罪を信するの謂ひにあらずして、寧ろ深く自ら内に醒めて、神子無價の光明を發揮し、吾れみづから基督の道德的眞精神を體得して、ルーテル彼れみづからの所謂『吾れは基督也』てふ深意識に觸れたるの謂ひならざるべからず。要之、ルーテルの所謂信仰主義は、直ちに吾人が正意

善業の道徳的活源頭に立ち還つて天下に叫びたるもの也。正解し來たれば、彼れが標榜したる信仰主義の位置や、斷じて低しといふべからず。天下の人心、一たびは惕然としてこの偉大なる新聲に目醒めたり。

ポロは、義人なし、一人もあるなし、人皆既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、唯だキリスト、イエスの贖に頼りて神の恩を受け、功なくして義とせらるゝ也といひ、『阿彌陀經』には一切定散の諸行を少善根福德因縁なりと訶し去つて、佛陀の名號を唱ふるをのみ絶對の大善、無限の功德なりとし、親鸞上人も亦彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、たゞ信心を要とすと知るべしと言へり。これらの語、動もすれば人の誤解を招くの虞れありといへど

も、少しく宗教的實驗に照らし來たれば、世にも是くの如く思ひ切つたる徹底親切の語はあらず、何となれば、こゝに謂ふ稱名や信心は、謂ふ所の世俗の道徳と乖戾背馳するものにあらずして、寧ろ其の因りて出づる活源頭を指斥するものなれば也、一切の徳行善業を活かし、高うする一大淨化力、一大靈化力を指すものなれば也。ポロの所謂功なくして義とせらるゝキリストの贖を信ずる信、そのものが、取りも直さず吾人の衷情より涌き出づる偉大無私なる道徳的活力にあらずして何ぞや。「惡人正機」を説くの淨土眞宗も、尚ほ其の惡人の中心よりの迴心歸入(信)を以て救濟の根本條件とはする也。

さあれ、如是信仰主義にして、若し吾人の正意善業のおの

づからなる活源頭たらざるに至らんか、かゝるは既に死形式に墮ちたるもの、信仰の累、これより太甚しきはなし。かくして羅馬舊教の自是主義若しくは外形的徳業主義に反抗して、起つて内心の自由、主観の獨立、個人の判断を唱道せるルーテルの純信仰主義も、その徒らに經典の言文、信條をのみ膠守して、贖罪の一義を説かんとするに至りては、是れ取りも直さず他が形式主義、他律主義の舊套を反覆せるもの、乃ち人心要求の波瀾こゝに復び揚がり、盪き、激して、新主観主義、信仰主義の旗幟隨處に翻りぬ。曰はく理性の光に特殊の重さを措くソシニアン派、曰はく内心端的の直證を説く神祕説、曰はく實行體得これ唯一の宗教也と叫ぶ敬虔派。

ルーテルの「信仰即義」の標榜と東西同調の宗教的精神をもて相照らせるわが法然、親鸞の偉大純眞なる他力念佛主義も、そのやがて形式化、他律化して、口頭の稱名三昧よく安養淨土を贏ち得べしとする末流の頽唐に至りては、宗教の眞生命既に業に逝きたり。

信仰の人願はくは窠臼の人となる勿れ。吾人をして常に因襲の舊夢を振り落として、新人の新衣を著けしめよ、新生の人即ち信仰の人、而して信仰の人即ち徳輝の人にあらずや。

祈れよされど求めざれ

われら毎事に祈るべし、謝すべし。さばれ何事をも神よ

り必期せざれ。祈れよされど求めざれ、唯だ信じて一切を神に打ち任せよ。われらの祈りを聴くと聴かざると、一に繋りて神の意こころにあり。

吾等パンを求めて、神は石を與へ給ふとあるべく、吾等卵を求めて、神は蛇を與へ給ふとあるべし。快樂を希うて苦痛來たり、光明を望んで闇黒到る。神は屢々吾等が熱涙の願ひをも嘲りの風と散らし、吾等が生死の歎きをも忘却の水と流し給ふ。吾等は空しく嵐に向かつて索め、吾等は徒らに影を趁うて走る。見よ神は屢々千萬仞の巖と壁立して、礫つらなすわれらがまげき祈りをも空しく寂寞たる反響と歸せしめ給ふにあらずや。嗚呼是れ吾等の堪へ得べき所なる乎。

打歎くものよ。爾の小を以て漫りに神の大を測ると勿れ。神は吾等が祈り求むるものをば吾等よりも尙ほ深く明かに知り給ふ。あらず。吾等の祈りそのものが、既に大慈招喚の詔勅にあらずや、大悲本願の迴向にあらずや。されば思ひ累ふと勿れ、惑ひ疑ふと勿れ、心安かれ、雄々しかれ、爾の萎えたる手を強うし、弱りたる膝を健かにせよ。かゝる試みの場合こそ、吾等神之子たるものが、正に古人と共に「彼れ我れを殺すとも我れは彼れに依り頼まんてふ浩々の一氣、徑ちに天地に充塞する大信念を推揮一番すべき好機會にあらずや。

神若し吾れを殺し給はん乎、これ殺さるゝとがわが窮極の善たり祝福たり、又實に善たり祝福たらざるべからざる

也。一事炳として日星の如し。而して如是堅信の人に
て、始めて能く神の曩に吾が祈りを聽き給はざりしは、其の
真に深く之れを聽き給ふ所以の理を心證默契すべき也。

信念と因果

一切に因果の法則行はるといふもこれ亦要するに一個
の信念にして、嚴正にいふ經驗的事實にはあらず、されば、こ
こに若し、我れ能く因果の鎖を破りて、絶対に事相の端を啓
き、第一事實を擲建すべしと信ずるものあらんか、前者の信
は以て後者の信を破するに足らざる也。

信念に含まれたる可能性は、一境深く神祕の非想天と連
なりて、吾人の經驗律を以てしては到底窺測すべからざる

ものあるなり。烈々たる信念の超發する所、基督の所謂山
をも移して海に入らしむべし。偉大なる信念の人は、眼に
光耀の相を觀じ、耳に默示の聲を聽く。こゝに「理外の理」あ
り、「神的論理」(Divine Logic)あり。かるが故に釋尊は生死因
果の繁縛を踏斷して最勝法王の正覺に座し、基督は自己が
アブラハムの在らざりし前より在りきてふ久遠神子の權
威を宣したり。彼等は實に時空の形式を脚下に碎き、因果
の範疇を眼中に空じたる靈智的大自在者也。

古ストアの學者等は、我れ能く吐納を窒して自殺するを
得べしと信じて、實に志かなし得たりといふ。信念の可能
力に制限を附すると勿れ、信念の充實發揮には不可測の容
量あり。我れ仁を欲すれば仁こゝに臻ると信ずるものは、

聖域彼れを去ると遠からざるべく、吾れは神之子也と信ずるものは、天父の慈眼不斷に彼れの光たり。大いなる信念を發揮するものは大人にして、小なる信念を發揮するものは小人也。吾人をして物質的因果の法則を以て漫りに信念の世界を律せしむると勿れ。因果は常に信念を左右すると能はず、信念屢々因果を左右す。

友をおもふ

過ぐる幾日のつれづれを慰めたる枕頭の薔薇花、今は名残なく凋謝したれど、花を贈れるあるじの友の情けの花は、凋まず朽ちず、芳烈のかをりいよ／＼高う薫じたり。

人生友なきは最大なる不幸の一也。何等不思議なる恩

寵ぞ、神は吾れに法の契りの淺からぬ友、幾個を送りたまふて、蕭條たるわが病骨にいのちの縁を賦したまふ。暮れゆく秋の一室の中にして、我れをして悠々獨り春日の氣象あらしむるものは、友の與ふる温情の賜物ならずや。壁上に、楣間に、枕頭に、床上に、はた書硯に、わが友愛の馨りは脉々として波うち動くなり。

吾れは峯上をのへの一本松ひともとまつの、孤高の風を侘ぶる身にしあれど、恩寵の天日豊かに照らし、友愛の花野美しくしう咲き盛りぬ。かくて感謝のひと日／＼あり。

法友は作るべからず、作る能はず、唯だ人生の悲哀の、深奥無限なるものありて、彼此一氣相通ずる所あるや、則ち相慕ひ相照らして、與に偕に永生の首途に上る。

懐かしきは未見の法の友にもあるかな。彼れ朝たにその思ひをわが枕頭に運べば、吾れ夕べにわが懐ひを彼れが座間に致す。我等が感應相思の前には、時空の障壁も碎けたり。廓然たる無礙の世界也、空靈の國也。
われ一日、枕頭凋落の花を見て、そゞろに友情の不朽をおもふ。(ある日のおもひ)

(明治三十九年十月)

將來の宗教豫想に關して 某氏に答ふる書

百年以後の基督教も、佛教も、矢張大體に於いては、相對時して現状を持續いたすべく候はんが、之れと駢びて基佛兩教の根本思想に立脚したる、若しくは時代の新要求と調攝したる異彩ある宗教思想も大いに開展いたすべく候はん乎、基督教にて申候へば、基督を從來の正統派の如く一柱の神と見、又は特別の意味にての神之子と見ずして、我等が理想を最圓滿に實現成就したる模範人、最長兄と見るが如き、もしくは凡神的趣味の更に大に加味せられたる如き進歩的基督教、又佛教にて申候へば、今日の他力本願の眞宗に個

人的人格を重んずるの思想、及び此世に於ける神國淨土の建設發展てふ社會的要素の一面の、更に大に説き加へられたる如き一種の宗教的意識は、いちじるく發展するならんと存候。

佛○教○諸○宗○の○中○將○來○發○展○の○見○込○あ○る○も○の○は○ど○う○し○て○も○淨○土○眞○宗○な○る○べ○く○候○而○し○て○眞○宗○と○基○督○教○と○は○其○の○中○心○思○想○の○或○點○々○に○於○い○て○一○味○溫○か○な○る○感○應○の○血○の○通○へ○り○と○も○思○は○る○ゝ○程○に○候○へ○ば○其○の○自○然○の○融○合○よ○り○成○れ○る○眞○宗○的○基○督○教○若○し○は○基○督○教○的○眞○宗○と○も○申○す○べ○き○宗○教○思○想○は○何○等○か○の○客○觀○的○形○式○を○取○り○て○現○は○るゝ○か○將○た○然○ら○ざ○る○か○を○別○と○し○て○隱○然○一○部○有○力○な○る○人○心○に○浸○潤○し○て○思○想○界○宗○教○界○の○一○勢○力○と○な○る○に○至○る○へ○く○候○は○ん○乎○今○日○に○於○い○て○も○宗○派○心○を

超越して此種の信仰思想を抱持せるもの決して妙からざるやう見うけ候也。若しこゝに一大天才の出でて此種の信仰思想の積まれたる薪に一閃の靈火を點ずるとあらんか、我が一百年後の思想界の光景は恐らく刮目すべき一壯觀を著け來たらんかと存ぜられ候。草々不悉。

(明治三十九年十一月)

求道の友に答ふ

拜啓

宗教は情の一字に歸著すとのたま言へる先日の御言葉、今も耳底に残り候て、大兄が一往御確信の態度こそ、ゆかしき限りには候へ。小生の信仰の、亦實に一字の情に開眼せられたる消息、とくに御了知の事と存候。宗教は情也。この萬古不易の眞理にゆるぎあるべからず候。哲學や、常識や、自稱正統神學などが何と申候とも、一切理窟の閑葛藤を超出して、宗教は他くまでも情也、頭々情也。理智や、意力や、情の色彩を帯びて、多少加はり來たることも候べしといへども、そのどんどこを敲けば、鏗然としてそこに情感の聲を聴く。

試みに思ひ候へ、神を愛し神に愛せられ、神を慕ひ神に慕はるゝことを外にいたし候て宗教てふもの候べしや。げに宗教家は同時に建徳の人に候べし、建徳の人たらざるべからず候。而かも彼等が立言立行は神恩佛恩のありがたさ、忝さてふ世にも優さしき法悦の心の花をその重大至深の動機といたし候ならずや、而してこれ世俗的道德より一等高き風光を著けたる道德に候はずや。宗教家また人道の理想に向上努力いたすべし。而かもこれまた主として神子報恩底の一念より流露し來たる向上努力に候ならずや。所詮宗教の神は冷ならず、嚴ならず、觸光柔軟と申す一種不盡の情味ある言葉こそ、尤もよく吾等が神に面接する一境の實驗を言ひ表はし得たりとこそ存候へ。若しそれ情の

求道の友に答ふ

醞釀しいだせる個中無限の風光を、理智の案上に分析し、按排し、組織するわざくれのごときも、亦これ一面の要求として強ち排し去るの要も無之候はんが、信仰そのものの第一義よりして見候はば、ちのづからこれ不急の言詮、まづは閑人の閑是非と看じ去つて可也。

おもへらく、若し情の中心に神之愛てふ醇素じゆんすを點じて、人格の全團塊を脹發せしむるもの有之候はん乎、そは取りも直さず宗教に候べし。宗教の人、至竟法悦の人に候かな。

兎角理想の一路に躓きがちにて、不斷の自咎自責に、光明の泉、枯れくゝなる御近狀、承り及び候て不堪同感。神に近づけは近づくほど、ちのが心の影黒さが一入強く自覺せらるゝ慣ひにて候へば、大兄の御苦悶は、信仰の人の通有態と

も申すべく、こゝにも一人、同じこゝろの不斷の重荷に行き悩むものありと知り給はば、幾分か自ら慰め、自ら寛らし給ふ筋の候べし。まして尋常形式的クリスチャンクリスチャン(彼等は概ね大兄の所謂何等の實得もなくして神又神の愛などいふ大事を、いと事もなげに口にするものにて候也)の舊窠を跳脱一番せんとし給ふ大兄にして、この苦悶を深うし給ふは、幾んどこれ自然の徑路とも申すべき謂はれの萬々候をや。然らば如何にしてこの苦悶と不安とを卸脱し得べき乎と大兄は問ひ給ふ。小生の答へは、極めて平凡にして簡明に候。神の慈顔を打仰ぎ給へと、唯だこれのみに候。自ら揣らず淺き實驗の上より申候へば、どうしたらこの苦しみの不安より脱し得べきか、自分の思案分別にて、如何ばかり

腕きに腕きて功夫いたし候とも、苦しみはいや増すばかり、所詮は駄目にて候。この時たゞ、何事も打任せの態度を取り、謙虚無心になつて、慈光の大み顔をまみくと思ひ入つて打仰ぎ給ふ外に、何の思慮功夫をもまじへ給はておはし候はば、光明早く脚下より通ひて、悠々たる感恩の一念、何故ともなく涌きいづるを覚え給ふべし。この一念、これ強求力索の結果にも候はねば、我れと思ひこしらへたる分別の沙汰にも候はず、唯だ何とはなしに涙をぼるゝかたじけなさの一念にて候。この何とはなしと申すこと、宗教にては尤も大切なる味にて候。吾等は神を知り、神の愛が解かつて後に之れを信ずるにあらずして、むしろ何とはなく、唯だ自然に神を信じ、神の愛を感じ、仰がずには居られぬ衷情無限の要求に催し立てられて、廻向信ずるにて候、而してこれ實に天地の大慈心が頑なる我等の心に浸みわたりたる貴き味にて候也。

吾等神に背けども、神は吾等に背き給はず、吾等が如何なる深き闇黒に泣く時にも、神はなほ永しへに變はりなき救済の慈光を廻向け給ふ。吾等が罪業の感の強きも、畢竟は、この慈光のいづこともなく一念の底に差しこみたるを自覺いたせる對照感とこそ存候へ、光明の感觸全く無くして自家罪業の自覺あるべき謂はれ候まじければ也。されば罪惡恐るゝに足らず、世に大慈の光を碍ぐるほどの罪惡なきが故なり。唯だ我等が習性に薰ぜられて十重二十重に築きなしたる罪惡の牢獄に、歸依といひ、迴心といふ一念の

腕きに腕きて功夫いたし候とも、苦しみはいや増すばかり、
所詮は駄目にて候。この時たゞ、何事も打任せの態度を取
り、謙虚無心になつて、慈光の大み顔を志みくぐと思ひ入つ
て打仰ぎ給ふ外に、何の思慮功夫をもまじへ給はておはし
候はば、光明早く脚下より通ひて、悠々たる感恩の一念、何故
ともなく涌きいづるを覚え給ふべし。この一念、これ強求
力索の結果にも候はねば、我れと思ひこしらへたる分別の
沙汰にも候はず、唯だ何とはなしに涙こぼるゝかたじけな
さの一念にて候。この何とはなしと申すこと、宗教にては
尤も大切なる味にて候。吾等は、神を知り、神の愛が解かつ
て後に之れを信ずるにあらずして、むしろ何とはなく、唯だ
自然に神を信じ、神の愛を感じ、仰がずには居られぬ衷情無

限の要求に催し立てられて、廻向信ずるにて候、而してこれ
實に天地の大慈心が頑なる我等の心に浸みわたりたる貴
き味にて候也。

吾等神に背けども、神は吾等に背き給はず、吾等が如何な
る深き闇黒に泣く時にも、神はなほ永しへに變はりなき救
濟の慈光を廻向け給ふ。吾等が罪業の感の強さも、畢竟は、
この慈光のいづこともなく一念の底に差しこみたるを自
覺いたせる對照感とこそ存候へ、光明の感觸全く無くして
自家罪業の自覺あるべき、謂はれ候まじければ也。されば
罪惡恐るゝに、足らず世に、大慈の光を碍ぐるほどの罪惡な
きが故なり。唯だ我等が習性に薰ぜられて十重二十重に
築きなしたる罪惡の牢獄に、歸依といひ、廻心といふ一念の

臆あかりをだに黠じ候はゞ、盡十方の無碍光、直ちに黒闇々裡を透破して、身はいつしか一味の遍照海中に攝取せられ居るに氣づき候べし。吾等涙を以て大愛の御顔を打仰げば、何故とも知らず罪の重荷の卸されたる感有之候。これ理論にあらずして實驗也。吾等が所謂煩悶とは畢竟神の愛てふ盡十方の光明界中にみづから寸大の黒影を作り出でて、われとこの中にとぢ籠れるやうのもの、唯だく／＼高きを打仰ぐを要す、さすれば件の影は忽ち光明海中に融け去るべし。不可思議なるかな罪業深重の苦悶の身そのまゝにして、回頭既に彼岸救済の岸頭に立てるとや。所詮罪業は自から除かんとして除き得べきものならず、唯だ至心の信樂を以て大愛の神を打仰ぎだにいたさばその神力の回

向によりて自然と罪業は取り除かるゝにて候。煩惱を斷ぜずして涅槃を得とはこの味に候べくや。かくて優々たる法悦永しへに吾れと共に在り。

何等の無理もなく、何等の思ひはからひもなく、一切經營の心、名残なく消え去りて、我れ知らず自然とあゝ有りがたしかたじけなしといふ如き貴き心の涌きいづるは、唯だ一心一向に神の御顔を打仰ぐ歸依のまごゝろの然らしむる所とこそ存候へ。而して是くの如きありがたし、濟まぬといふ如き報謝の一念に、吾等は起つて道德的新健闘の人となる、否、實に然らざるを得ざるなり。法悦即ち建徳の人也、スピノーザの所謂剛毅（フォーテチュード）の人也。

先頃一道友來たり候て、この夏、國に歸省し、瀕死の妹を看

護して、いろく〜と案じ餘まれる末、妹をあなたに任せいたします」と、真ごころこめて神に祈るを得候ての後、始めて不思議にも大慰安を得たりてふ實驗の一ふしを語り聽かせ候ひき。げにこの事あるかな、小生も今度といふ今度の病態の危機に於いて、やゝ薄つぺらでなく、沈痛に、純粹に、歸依信樂の至大力を味ひ得たるやうに存せられ候。從來とても、たびく〜黒き死神の見舞をば受け候ひしかど、尙ほいづこにか自力にて焦躁り腕くの餘裕も候ひけるが、此度はかゝる一切の努力、一切の思ひ煩ひに寸分自ら寛うするの餘地もなく、まやにむに、生死一閃の瀬戸際に驅り立てられ申候。小生は人生最嚴肅の一刹那に立ち申候。唯だく〜神を打仰ぎ申候。一念の塵もなくなり申候。而して不思

議にも、大苦痛の中に言ひがたき慰安の光明、いづことしもなく、朧ろげに充實し來たるを覺え申候。その一種清涼にして甘美なる無類の法味は、今思ひいで候てだに、現實のものとしも覺え候はず。あゝこれ單なる諦めにあらず、悟りにあらず、まして瘦せ我慢にもあらず、我れを擲ち盡くして光明我れに蘇る歸依信樂の至大力にて候也。禪家が懸崖に手を放つて絶後に蘇る底などいへる消息、方に纔かにその一端をうかゞふに足るべく候はんか。一時猖獗を逞うせし小生の病も、爾來幸ひに、おひく〜と怠り申候。

實驗は力也。一たび大愛の光明に觸れたる大歡喜の實驗を有し候はんものは、再び光明園外に脱出せんとするも脱出するを得ず候。吾等うれしさ、ありがたさの餘りに、神

を愛せざるを得ず候。吾等神より遁れ去らんとすとも、神の方より遁がし給はず候。吾等は神の捕虜となりたるに候。かくての後も、尙ほ吾等はまばく罪の人となることあるべし。光明攝取の人とても、依然として煩惱の林、生死の園を脱し得まじく候べし、さりながら吾等はもはや復び永く罪惡の奴隸となることあるまじく、否、罪惡直ちに翻りて神恩の慈光となりて吾等を照らし來たる、傷ましき蹉躓は、なかくに吾等が神に近づく縁となり來たる。「癢癩疾痛擧な吾身に切なり。何物か是れ大愛を味ふの媒たらざるべき。是の一境に至り候へば、吾等の信仰は大磐石のごとく、切つても切られぬ法縁は結ばれ候なり。闇黒の中にして、光明の思ひ、雨夜の月のいづこともなく照らし來

て悲しみ苦しみの中に、軟かに涼しく美しくしき慰藉のおもひ、綿々として存續す。不思議なる恩籠にしも候かな。この味ひ、取りも直さず大兄が會て情操となり趣味となりたる信仰とのたまひし境地に候べくや。如是優々たる甘美清涼の心狀これ則ち不斷の法悦にして、而して不斷の法悦即ち不斷の見神也。希はくは吾等をして常に大愛のみ顔を打仰がしめよ。法然上人の歌に曰はく。

月影はいたらぬ里もなけれども

眺むる人のこゝろにぞ住む

ゆかしき歌のこゝろとは思ほし給はずや。草々不宣。

(明治三十九年十二月)

偉大なる凡人主義

一
人生まれて廓然天地の志あり。いづことしもなく思ひ
憚るゝわれ等が一念の跡を蹤へば、或時は浮雲變態の中に
入り、或時は滄波溟漠の國を之く、而して其の趨向の歸する
所、肅然として竟に是れ天上光榮の生活を慕ひ迎るの心な
らざるはなし。あはれ是の一念、之れを歛むれば耿々とし
て方寸帝則の光となり、之れを縦てば綿々として天地杳冥
の根につらなる、而かも人閒永しへに形骸の羈を脱する能
はざるは何等不思議なる因縁ぞや。高邁の志氣一たび超
發しては、直ちに星夜うつくしき思ひに分け入るべく、鄙吝

の念慮一たび萌しては、忽ち溝瀆の裡に透迤たり。昨、切利
天上の人頭を回らせば既に無閒地獄の底にあり。佛魔一
念を閉てて覷ひ、迷悟方寸の隙に闖ぐ。人類以上の高さも
のよりして之れを見れば、是くの如きは滑稽の極みなるべ
しといへども、而かもこれ實に我等が深大の悲劇たらずん
ばあらざる也。嗚呼我等人類はこれ佛か、魔か、聖か、凡か、半
神か、半人か、そもく亦一切非耶。孤雲尙ほ碧落の深きに
迷はず、一鳥靜かに林叢の繁きを樂しむ、人惟り如何なれば
浮萍の思ひ暫くも息む時なく常に宇宙の茫々に迷うて自
家本來の面目に安んずる能はざるぞ。

二

人閒に神性ありといふ、一語最も了すべし。さはれ何を

か人間の神性とはいふ。人に本能あり、理性あり、知識的生
活あり、實踐的性能あり、そのいづれをか果たして人生最深
奥の實在とはなすべき、之れに透徹的確の一解を下ださず
んば、吾人は竟に自家本來の位置及び面目を明かにして復
た行雲流水の天地に優々自適する能はざる也。

或は人間最勝の本性を^理知の活動そのものに外ならず
とするものあり。彼れ乃ち口を極めて西歐思想史上に特
殊の一大光彩を放てる希臘生活を讚美して曰はんとす、あ
はれ、美しくしきは古希臘人の知識的生活なるかな。彼等は
知識を知識そのものために戀ふるの民なりき。彼等は
本能生活の流蕩を忌み、快樂生活の泛濫を避けたり。彼等
は常に情熱の激湍に制裁の柵をかけたり、彼等は一切己甚

の兩極を避けて、之れに調和といふ渾然たる特相を賦した
り。藝術の美に酔ひ、官能の快を戀ふるの民にして、而かも
居恆、名檢を貴び、中庸を離れず。調和といひ、適宜といひ、圓
満といひ、秩序といふ、是れ皆彼等の重んずる所にして、而し
てこれやがて其の主知的生活、究理的精神の燦乎として輝
き出でたる所にあらずや。彼等は人生の究竟目的を幸福
にありとし、幸福を有徳の生活にありとし、而して有徳の生
活を^理知そのものの活動にありとせり。崇^{たよ}いかな彼等が
知識的生活や。知識の光耀精華、これ惟り人類の神と連な
る最勝最尊の本性にあらずや、而して如是の觀を懷けるも
の、惟り當時一般の民衆に止まらざりき。聽けよ、彼等が一
切の要求及理想の代表者として一代文明の光華と謳はれ

たりし哲人當年の深語を。ソークラテースの唯知觀は姑く言はず、プラトーンはた理性に人心最高の權威を認め、理性の中心活動を知識にありとし、而して知識の最も全備せるものを哲學的知識となし、かくして天地の實在を一團の觀念組織に再現する哲學者の思索的知識を以て理性の最高活動と觀じたりし也。彼れの所見によれば、世に哲學より最高貴の職分はなく、哲人の知識より最高貴の徳業はあらざる也。而してアリストテレスに至りては、更に理性最勝觀に一段の光彩を賦したるを見るなり。彼れは先づ人閒が人閒として他の動植物的生活と彙別せらるゝ所以の特殊の性能、職分を以て畢竟理性に外ならずと喝破し、噴々としてその靈能を稱美せり。以爲へらく、哲學者の思索

的、瞑想的、生活は人生最尊の徳也、一切の活動のうち、思索、冥想ばかり生活上の必需及びその他の事情外縁に羈せられざる獨立の活動は、あらず、他一切の活動は皆その一々その事以外の目的を有てり、政治家といひ、軍人といふ、彼等の活動は如何に高尚の觀はありともいづれか、皆その活動以外の目的に絆られざる。ひとり哲人の思索的活動に至りては、毫も何等の事情、境遇に羈約せらるゝとなし。彼等に於いては、思想その事が自家目的也、それは自家みづからに給足して他に須つ所なき獨立純粹の活動也。一切の徳行のうち、思索、冥想ばかり清淨不染、確實恆久なる悦樂を吾人に與ふるものは、あらざる也と。嗚呼わが偉大なる哲人が知識生活の風光を説き來たつて、游泳の態を盡くせる、一に何ぞ

爰に至れる。其の進んで純思想生活の、我等人間に於いて、餘りに氣高く且つ美しくして、さながらに神生活そのものに適へりと讚美一番せるが如きに至りては、洵に是れ知識的生活のために千載の光彩を揚げたるものといふべく、又以て彼れが冥想生活に於ける一往深邃なる自家實驗の消息を解すべきなり。轉じて見る、歐洲中世哲學の光華たるトマスが神の本性を神知そのものにありとして、神の意志は絶對的に神知そのものに羈約せらると説きたる、さては近世哲學初頭の大立物たるスピノーザの如き、はた知識を人間の最勝性と見做し、其の完成圓現を以つて人生の至善と斷じたり。彼れが、一種深奥なる神祕觀を説き出でながら尙ほ其の愛神を言ふや、かの基督教徒がむねと情意を以

て神を愛するとは異なりて、専ら知識的に自然萬有を理解するの意味に於いて神に分け入るの愛、即ち謂ふ所の「知識的愛神」を高唱したるが如き、いづれか皆形而上學上、人性學上、理性の知識的活動を以て人生最高の權威と見做したるものにあらざりける。斷じて以爲へらく、理性は神性也、人間最勝の性能也、知識的向上、是れ人生唯一の至善也、目的也、*Summum bonum* 也。

三

疊々として説き來たれる論者の言、頗る吾人の意を得たるものあり。吾人も亦論者と共に、知識の光輝を戀ひ慕へる古哲人が向上の態度に、神性の情をこゝろに禁じがたきものあるを覺ゆ。げにや、古希臘に於いて一たび掲げ出ださ

れたる偉大なる唯、知、観は綿々不斷の流れをなして歐洲近代の思想界にまで押出でたり。苟も思想の人にして、誰れか一たびはこの史的光彩ある唯知的思潮の中流に掉さざる。さはれ、この思潮の中流に掉すの人にして、誰れか又一たびは、猷然たる空虚の淵の底深く渦まき蟠れるを望見して、驚き且つ怖れざる。理性は果たして神性なる乎、人間の最勝性なる乎、知識の向上は人生の究竟目的なる乎、知識は果たして吾人をして直ちに神と和ぎ、神と連ならしむる人性最深奥の活動なる乎、一言すれば知識は果たして、吾等傷ける靈魂の救済者なる乎。是くの如く問ひ來たりて、近世的文華の離披の光景に酔へる吾人、尙ほ且つ慄然として惑ふなり。猶太の古賢王ソロモンは知識を眞生活の根源と

なし人生の不幸は惟り暗愚に存すと喝破せり。されど吾人最深の要求に對しては、如是知識も畢竟浮雲空華の觀をなさざるべき乎如何。是くの如くに問ひ來たりて、吾人重ねて迷ふ。論者の見是耶、之れを疑ふ吾人の言非耶と。

四

知識は人をして驕らしむとぞいふ。知識に無限の空虚と寂寞とあり、無限の空虚と寂寞とを藏する知識を抱いて、傲る人の心の愚ろかにも淺ましくもあるかな。空虚なるが故に知識は人を傲らしむるか、人を傲らしむるが故に知識は空虚なるか、唯だ知る、吾人は知識の竟に斷じて人心最深の要求と交渉する所なきを。吾人は常に無智蒙昧の悲しむべき状態を脱却せんことを希ひ、而して此く脱却した

る新状態の、更に更に深き悲哀の源たるを知らざる也。知識何が故に悲哀の源たるか、何が故に「憂患の始めなる乎、他なし、其の竟に形式的、對待的性質を離るゝとを得ざれば也。形式的也、かるが故に縦に實在の價值意識に觸るゝ能はず、對待的也、かるが故に横に時空因果の鏈に縛られて、一關跳脱の眞風光に參ずると能はず。峰上に峰を重ね、燈外に燈を掛けて永しへに實相無邊の天を躋りゆく知識の姿は勇ましけれど、顧みれば、吾人が無始劫來の深き靈魂の叫びは、依然として瘡やされざるにあらずや。一たび自然萬有が擧げたる沈痛無限の煩悶の呻きは、今尙ほ我等が胸臆の深處に遠嵐の如く響きどよみて日夜休止せざるにあらずや。嗚呼知識をしてその本來とゞまるべき位置に止まらしめ

よ。知識は人生の偉大なる光明也、まかばあれど、そは竟に吾人をして而り神に接せしむるの光明にあらざる也。知識をしてその自大無限の夢より覺醒せしめよ。吾人をして知識に關して常に謙遜なる態度を學ばしめよ。吾人をして古の偉大なる科學者等と共に、未知の眞理海の無限に渺茫たるを嘆ぜしめよ、而して又曰はしめよ、吾人は唯だ吾人の知らざるとを知るのみと。嗚呼未知の知識海は、永しへに其の岸涯を測り知るべからずして、而かも既知三四の眞理の礫なるもの、亦所詮は實在の中心に觸るゝの器たらずとせば、知識の人生に於ける位置、亦知るべきにあらずや。吾人は知らずして自ら知れりと思へり。知れりと思へる事も眞に知れるにあらざる也。是非善惡の辯、百端して竟

に茫々に墮つ。親鸞上人喝して曰はく、善惡の字知りがほは、大それごとのかたちなり」と。誰れか自ら知れりといふ、全人をもて知らざる事をも知れるが如くに思ひあがらしむる、是れ知識の大弊にあらずや。知識の正當なる位置を知つて、而して後、知識は始めて神に事ふる聖壇の一物たり、知識の位置及び價值を知るは、即ち眞個の知識也。

又譬ふれば知識は猶ほ燭火の如き乎、燭火は以て人生の行路を照らすべし、而かも竟に人生の行路そのものを斫り闢き、創り出だすと能はざる也。知識は人生の目的を獲得し、理想を實現するの事情、制約、方法、手段等を計較し、究明し、功夫し、案排すべし、而かもそは竟に人生の目的、理想そのものの中心生命を掲げ出だすと能はざる也。ヒューム、ハッチ

ソンなどの會て既に論著したるが如く、目的といひ理想といふが如き、人生價值の感の繋る、根本的對象を給與するものは、寧ろ主として吾人の非理性的、非知識的、方面の性能にありて、理性や知識は、その究極の意義に於いて、竟にこれに與らずとせば、あはれ知識の光彩も亦落莫たるかな。吾人は理性もしくは知識その者の本具の衝動性を全く無視するものにあらず、さはれ、人生第一等の事を司るものは、所詮吾人の非知識的性能にありと謂はざるべからず、知識は非知識的實在に驅使活用せられて、始めて其の適當の意義を發揮し來たるべし。知識は畢竟奴婢也、手段也、第二義諦也。

五

又思ふに、知識は吾人をして轉迷開悟せしむるの光なり。

轉迷開悟は一躍を意味し頓證を意味す。曰はずや、凡夫も悟れば佛也と。一知見の光照する所、罪惡深重の劣機をして回頭則ち神仙たらしむべしとぞいふ、何等壯快なる一躍の光景ぞや。而してこれ實に心靈界に於ける火の如き實驗的事實として、何人も得否まざる所なるべし。さはれ、知的光耀といふ事は斷じて容易にあらず。げにや悟の刹那は洞然たる無碍光の一境たるべし、然れども悟前は如何に、悟後は如何に。人誰れか悟前に渴仰の喘ぎなからん、人誰れか悟後に蹉躓の涙なからん。それ悟るには機縁の純熟を要し、而して機縁の純熟には渴仰要求の誠の積重透徹するを要するなり、叩かずんば啓かれず、要求渴慕の誠ありて、則ち開悟感應の揭焉たるものあり。而して個中事のづか

ら、知識以上の消息を含めりと思ふは非耶。轉じて悟後の消息を見る、悟りての後、その悟りを眞に己れの有^もたらしめんには、更に知的飛躍以上の分野に進み入らざるべからず。吾人二たび悟中の景に立つ、皇々たる四達、所謂天下我仁に歸するの概あるべし。而かも頭を轉ずれば、黯然たる悲哀の影は、早くも四邊に迫り來たるにあらずや、たとひ悟後の悲哀は、恩寵報謝の感と離れざる不可言の甘美法悦を伴ふを實驗上の事實なりとすとも。げに拂へども除きがたきは煩惱の雲霧なり。光明の子、新生の人にして、尙ほ且つ時をも分かず、罪障迷執の蛇に纏ひ苦めらるゝを不斷の事實なりとせば、況して煩惱具足の凡夫をや。寸善に笑ふの人は、應て尺魔に泣くの人、われこの罪を復びせじと誓ふ、而し

て次の一瞬には、早くも人知れず深刻なる痛歎の胸を拊つにあらずや。あはれ、何人かこの苦き苦き實驗なからん、而もかくして理想の霜柱を崩しては、立て直しゆく所に、吾等が限りなき靈界進歩の消息はあるなり。而してこれに要するものは、單なる知識の光耀開發にあらずして大悲心の迴向攝護に因るなる無限の努力也、精進也、奮勵也、訓練也、切蹉也、至心の信樂也。されば悟の全意義は知的一躍に盡きず、佛家尙ほ頓悟、漸脩を説くにあらずや。悟をして眞の悟たらしめんには、謂ふ所の悟以上の消息に須つべし。悟をして信に連ならしめよ。悟れども尙ほ悟りつくせぬ人生無邊の光景に歸依、信樂の涙あらしめよ。悟は窮極にあらず、一切にあらず、悟は畢竟前を約し、止めて、後を啓き、舉

ぐる靈界發展の一轉機、一契點、一道標たるに過ぎざる也。迷と悟とあり、これ事實也。然れども吾人をして餘りに花やかに迷悟の二境を分別せしむること勿れ。若し迷に一點の光明なく、悟に一翳の闇味なしといふものあらんか、是くの如きは餘りに人生普通の實驗を無みしたる不通の論なりといふべし。迷裡悟を萌し、悟中迷を藏す。徳業の圓成は、概ね沈々たる不斷の發展に須つべくして、世俗の漫然として思惟するが如き、奇蹟的一躍を允さず。勿論、宗教上に轉換、若しくは悟入といふが如き消息は、吾人の經驗的生活より因果的、必然的に推論し得るものにあらずして、二者の間に到底一種の神祕的、飛躍あること否むべからざる事實なれど、さりとて、迷と悟と、凡夫と覺者とをさしも全

然、二元的に峻別し得と思はんは太謬の見なるべし。昔しはスピノーザ、不明瞭且不全なる知識と、明瞭且十全なる知識とを兩々際やかに相對立せしめて、吾人の能く一より他に一超直入し得べきが如くに言ひ做せるふしありしや、ライブニッツ乃ち道德的理想の不斷の發達を高唱して、スピノーザの如は一躍論の、人類通有の實驗と背けるを指摘したりき。正に評して一半の眞理とすべし。更に想ふ、古ストア學派の哲人等が、知識を重んずるの大過なりしや、一知見の透する所衆徳立どころに華さくと觀じて、賢なれば絶對に賢なるべく、愚なれば全然愚なるべしと、放焉説き去つて顧みざりしを。是れ豈迷悟一躍論にあらずして何ぞや。而かも是くの如き絶對的主知論の、人生通有の實驗

に照らして、竟に相支ふべからざるを見るや、その或るものは乃ち徳即活^〇力^〇（フォース、アンド、ストレンジス）也と叫びて、唯知觀に一步を進め、賢愚凡聖の間にも、尙ほ無數の階級の層々として力行躋擧すべきものあるを言ふに至れるにあらずや。知識はこゝに一步を躋きぬ。其の降つて、羅馬のストア學者、セネカ若しはエピクテリトス等が、修徳の要は煩瑣なる知識論議の沙汰にあらずして、寧ろ不斷の實習、訓練、切蹉、力行にありとして、自ら懲忿窒慾、悔改斷食の難苦行を敢てしたるに至りては、こゝに早くも既に實踐的精神の發揚を見るべく、而して時代の氣勢の轉ずる所、滔々更に一步を進めて、理性の自悟自彊は、所詮吾人をして圓滿の徳果を獲しむるの道にあらずと觀ぜしめて、天地の絶對者に歸

命信賴の眼をそゞぐ一種の宗教的敬虔の情調の、油然として當年の人心に浸潤横溢するものあるに至りては、嗚呼これ前後何等の轉變ぞや。かの當年ストア哲學者の一大光榮たりしマールカス、アウレリウス帝の敬神愛人の宗教的熱情は、直ちに後の基督教の根本精神にさへ其の歩武を接したるにあらずや。(彼れが『默想錄』の一卷は、我等近代人をして心跳らしむべき高調なる宗教的情操を宿したり。)主知觀一轉して力行觀となり、力行觀更に移りて他力倚信の宗教觀とはなりぬ。一たび歐洲當年に於ける思想界の趨向を冥想するもの、誰れかは個中の消息に自家内生活の痛切なる實驗の響應を聴取せざるべき。至竟、知識は竟に人心最高の權威にあらざる也。

六

知識の分布は平等にあらず。天賦、境遇、位置、資力、及び其の他の事情によりて、人の知識的生活の恩澤に浴するの程度には、多少厚薄さまざまの差別あるべし。カントやニヒトンの知識的完成は、萬人の希ふ所にして、而かもその容易に達しがたしとする所、知識文雅の神は概ね少數者たる天才の徒に嘉惠すること篤くして、而かも多數の民衆に至りては、概ね蚩々たり、慣々たり。若し知識あり文采ある貴族的少數者のみ、救はるゝことを得て、無知不文なる平民的多數者は、救に參ずることを得ずとせば、吾人はこの森然として章ある大宇宙の組織を根柢より呪詛せざるを得ざるなり。知識若し人を救ふ唯一の光ならば、吾等の神は畢竟

プラトーンの神のみ、カントの神のみ、乃至ニュートンの神也、希臘人の神也、一切衆生の濟度を本願とする大悲平等の神にはあらざる也。知識若し人の人たる最勝性能の活動なりとせば、神國の救濟組織はその根柢より崩れざるを得じ。何が故ぞ、一般民衆は概ね高上なる知識的生活に縁遠きやからなれば也。究竟するに、知識の光は萬人に通ずる普遍性、平等性を缺きたり。而して普遍性、平等性を缺きたるものは、以て一切衆生を神に連ならしむる最勝性とするに足らず。「顔何人哉、こゝろが、こゝろ之則是といふ、而かも之れ人心の實踐的方面に就きて言ふべくして、知識的方面につきては言ふべからず。璞、琢磨を経て知識の光あり、されど琢磨を経ざる璞玉を抱けるもの、これ世の多數民衆の常態ならずや。

琢磨の光もとより貴ぶべし。されど光を放つ當體の璞玉は、更に貴ぶべき也。

七

然らば謂ふ所知識的光明の當體たる璞玉とは何ぞ、謂ふ所人心の實踐的方面とは何ぞ。かく問ひ來たりて、そゞろに想ひ出づるは教授パウルゼンが、其の倫理學上の一著書中に於いて、カントの日記の一節を根據として、カントの倫理哲學の有力なる一動機を、ルソウの影響より來たれる普通平民權の確立にありと觀じたる極めて趣味あり暗示ある一段の論述なり。カントの日記に曰ふ、

予はみづから性來の學究也、予は知識に對して熱烈なる渴望を感じ、不斷に知識上の進歩を得んことを焦躁

せり。予は實に之れを以て人類に貢献する事業なりと信じて、傲然無知の愚民を蔑視せし時もありにき。ルソーは予を覺醒したり。予が矜高自大の念は消滅しぬ、予は人類の尊敬すべきことを學びはじめたり、而して予は予自らの取れる職業が、他の一切の職業に價値を與へ得と信ずるにあらざれば、言ひ換ふれば、普通人類の權利を再建するを得と信ずるにあらざれば、予は普通の勞働者よりも劣るものと思惟するに至れり、云々

と。パウルゼンは、この趣味ある日記の一節に基づきてカント一代の眞個の天職、事業の、全く人類即ち普通の平民的個人の權利及び價値を確立宣揚するにありしよしを論じ、

更に個人の價値はその意志、人格、そのものに存して、かの教育ある貴族的自大の徒の思惟するが如く、知識、文雅の上に存せずといふこと、これ實にカント倫理哲學の中樞として迴轉せる根本的信念なり、とやうに論著せり。夫れカントは曠代の學究的天才也、而かも一たびルソーの影響を受けて、其の知識的自大の夢より覺め來たるや、曾て傲然として瞰ちろしたりし無知の民衆を尊敬して、其の價値及び權利の確立發揚を以て、ものが一代の天職とするを辭せざりし也。自ら一般民衆の個人的價値を光揚するにあらずんば、その光輝ある一代の學究的事業も、以て誇るに足らずとなしたる也。何等の覺醒、何等の識見、而して又何等の謙遜と何等の確信ぞや。嗚呼冷頭世と關らざる儒流の眼底、尙ほ

且つこの美はしき熱情の涙ある乎。吾人この一段の論述を讀みて、今更の如くカントが尋常學究を抜く千仞の器なるを思ふと共に、更に肅然として人間人格に於ける偉大なる平等性を觀じて、光榮無上の感に打たれずばあらざる也。

八

「この世界及びこの世界以外に於いてだに、無制限に善と呼ぶべきものあるを考ふる能はず、そのこれあるは唯だ善意のみ。」

「一善意の善なる所以は、其の或事を遂行し或結果を齎らし、又は或目的を獲るに適したるが故にあらざして單純に意志そのものの爲めの故に善なるなり。換言すれば、意志みづからに於いて善なるなり。」

こは是れ、カントが其の大著『倫理哲學基礎』の冒頭に説き起こしたる一代の大獅子吼なり。以爲へらく世に一個の善意を外にして絶對純粹の善はあらず、富や、名や、地位や、權力や、はた才幹や、技能や、勇氣や、決意や、判斷や、すべて皆其のもの自身に善なるはあらず、此れ等一切の物は、善意の善用を須つてこそ、良結果をも奏すべけれ、若し意志善ならず、隨つて其れに形づくらるゝ性格善ならずんは、これ等の物は適く以つて甚だしき自他戕賊の料たらんのみ。眞個の善は、かゝる一切の外物に繋り存せずして、唯だ一個の善意そのものに存す、而して善意の善なるは、他の何等の經驗上の結果を須つて知るべきにあらずして、其のもの自身に先天的光明を放つなりと。是くの如きはカント善意論

の大都也。如何なる謬戾奇怪なる倫理的結論の個中に含まるべきかは姑く問はず、こゝに且らく學としてのカント倫理の價値を問ふを休めよ、この威嚴あり精彩ある善意觀こそ、カントが據つて以つて、一面には獨逸當代の維新期を風行せる淺薄極まれる幸福觀、功利觀に對立し、他面には知識、開明、乃至文雅といふとに唯一の重きを置きたる滔々たる當代の偏知識的潮流を堰き止めんとしたる一大鐵案にはあらざりし乎。吾人は歐洲第十八世紀當代の思想界に於いて眞摯謹嚴なる哲人カントが奮躍聲を厲しうして流俗の惡思潮と戰へる意氣信念を想うて、未だ曾て肅然として敬畏の念を起さざらばあらざる也。カント説いて曰はく、善意、即、絶對的、最勝、善と。あゝこれ何等の福音ぞや。

而して彼れが人格論に至りては、更に光彩あり、徹底あり、而して權威あり。何をか人格といふ。カント以爲へらく、意志が意志自からを目的として、他一切と相須たざる、これ人格也。人格の目的は、人格自家にありて、之れによりて齎らさるゝ幸福其の他何等の結果に繋り存せず。人格の價値は人格自家にあり。そは品位也、品格也、他の物件の金錢と交易し得べきが如きものにあらざる也と。カントは如是觀法に立つて、其の有名なる一金則を抽き來りぬ。曰はく、人閒を爾みづからに於いても、他人に於いても、常に目的として取扱ひ、唯だ方便として取扱ふと勿れと。陳べてこゝに到れば、吾人一半の所思は、既に業にカントによりて道破せられたるの觀なきにあらず。人性一貫の高貴崇嚴なる

平等的一面を洞見し得て、知識文采の教養なき一切の民衆をして尙ほ且つ軒擧みづから光榮の感に禁へざらしむるの嘉音を傳ふ。洵に是れ哲人千秋の確論なり。畢竟歐洲第十八世紀當代の主知的思潮に抗立して、情意でふ實際的性能を、人閒最深奥の本性と宣言したる是れ偉大なるカント人格論の面目也。カントの倫理思想は重んずべし、而かもカント倫理思想の少くとも中心の動機の一をなせる其の崇高なる人道的熱情に至りては、更に大いに敬重歎美すべき也。

九

神は人閒に賦するに、第一に情意を以てし、第二に理性を以てしたり。はいふこゝろ必ずしも理性を情意より派生し

たりとにあらず。第一の賚は人閒が神の子としての根本的存在權也、第二の賚は吾人が件の存在權を保護確立する所以の器也、道也、手段也。吾れ是の觀法に立つて、乃ち大體上世の所謂主意説(主情意説)に與みし、而して古人と與に曰はんとす、神は善なるが故に之れを意志するにあらずして、神の意志なるが故にそはやがて善なる也と。神は神知の掲ぐる法則の觀念に従うて動くにあらずして、寧ろ神の自由に動く所、やがて森然たる法則の章をなす。神は範して馳驅せず、寧ろ馳驅してやがて範をなす。神にその意志を規定すべき窮極目的てふものあるなし、寧ろ神の大自由の發動そのものに、窮極目的はちのづから具はるなり。或は寧ろスピノーザ風の表現法に従つて、神の本性の完全相の、

偉大なる凡人主義

おのづから溢れ且つ充實する也とも謂はん乎。要するに、神はこの意味に於いて、自由と必然とを最圓滿に調和したる藝術的天才者也。吾人は必ずしも知識を呪詛せず、唯だ知識の所詮情意内在の一條理たり、一法則たり、一屬性たるべきをいふのみ。而して是くの如き神性を分有せる吾人の人格が、亦復た情意の要求を以て其の根本實在と見るは當然の理にあらずや。

それ一切の善美なるもの、崇高なるものを戀ひ慕ふは、人間通有の根本性情なり。未だ善美または崇高の何ものたるを知らずして、而かも善美崇高を慕ひ求むるあこがれの一念、既に隱約として人間性情の根柢に浮動するあり。プラトーンが戀愛エロースといひ、シャフツベリエンシェンシヤズムが熱情と呼びて、人

生に於ける一切の偉大善美の源泉と觀じたるもの、やがてこの隱約浮動の根本的情意にして、これ實に人間普遍の性能也。善美の獲得享受は吾人の希ふ所、而かも善美に憬るる如是性情を有するその事は、更に吾等人間の一大光譽にあらずや。

人誰れか造化眞宰の秘訣を褫ふ知識的超人たるを希はざらん。而かも若し自己の一靈魂を救ふ能はずんば、これはた何の詮ぞ。吾等もし沙翁たり、ニュートンたるを得ずとも、自家一己の靈魂を救ふとを得ば、こゝに無上の安心と、絶大の事業とあり。清き心情と、貴き品性と、是れ唯だ吾人の靈魂をして直ちに天地の神と連ならしむる大道にあらずや。世の知者、學者、徒らに思を高遠に馳せて、その中心不

可測の空虚に襲はるゝの時、智なく學なき一般民衆をして、尙ほ且つ悠々神と偕に歩ましむるものは、平凡他奇なきこの堅實なる人生の高道にあらずや。「智者いづくにある、學者いづくにある、この世の論者いづくにある」。美言尊行、これ豈吾等が神に之くべき唯一最勝の靈的通行券にあらずや。隴頭に汗を拭ふの人よ、街上に鞭を揚ぐるの人よ、卿等また知識文采の卿等の心身を飾るものなきを悲しむと勿れ、卿等は卿等の心情と人格とを取つて、蔚として天地の大系統に參じ得るにあらずや。卿等は又古聖が所謂一切の病根たる傲慢を治すべき謙遜てふ最大美德を學ぶ最恰適の位置にあるにあらずや。人格然り少くとも其の根本質は知識よりも大いなり。吾等は皆人格の所有者也。一文

不通のもの、亦この一念の尊嚴に於いて、優々天地の間に在るべき也。

十

人生最高の向上心は知識にあらず、黄金にあらず、事功にあらず、唯だ一個の善人たらんことにあり。基督は教へて曰はく、天の父の完さが如く爾曹も亦完くすべしと。何人も善人たるの權利あり、可能あり、縱令ひ盛徳の君子は得て期すべからずとせんも、我等は尙ほ大愛の護念の下に、日に新たにして又日に新たなるの境地を拓くを得べし。農夫は耒耜を執りながら、善人たるを得べく、商估は簿書牙籌の間に善人たるを得べし。鍛鐵砧邊に剛健なる人格のひびきを聞き、煤烟堆裏に醇美なる品性の光を見る。彼等

は草莽の閒、市塵の中にありて、世の勢利聞達を求めず、而かもいづこともなく我れを圍繞せる天地の大光に一身の運命を託して、悠々として日常の業を執る。世にも美しくしき隠れたる偉人ならずや。嗚呼誰れかいふ、無知無識の衆愚と。而かも世の高談空心、沾々として自ら喜ぶ知識的自大の徒に見るべからざる高貴純潔なる性情品藻は、むしろ多く彼等が謂ふ所の「衆愚」の閒に輝けるにあらずや。吾等は謙遜、柔順、平和、克己、獻身、勤勉等の美德をば、寧ろ屢々世の所謂下層社會の閒に發見して、感歎の涙とゞめあへぬとある也。彼等はその素樸不文の裡にだに、屢々敬虔の高調を宿したるにあらずや。我等をしてルソー及びカントと共に「我等が尊敬すべき民衆」と呼ばしめよ。我等をして又常不

輕菩薩と共に「我れ汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし」と謂ひて一切の人を讚歎禮拜して休まざらしめよ。彼等は平凡也、されど神の前に大い也。彼等は偉大なる凡人也。

我等若し平民的善人たり、又平民的善人たる一個の志望アスピレーションに生くるを得んか、全世界も來たつて我れに與みすべく、諸天善人も亦來たつて我等を擁護すべし。我等如何にはかなき微賤の業を營むとも、若し神と偕に働くの自覺をだに有せんか、是れ取りも直さず絶対之事をなす絶対之人也。天下の達尊也、達德也、以て尙ふるものあるなし。獨往獨來、富貴も屈せしむる能はず、威武も劫かす能はず、無碍人也、自在人也、希有人也、最勝人也、不退轉位の妙華人也。この至大至剛の力を體得して、人始めて神子の自覺に入る。それ神

子〇の〇自〇覺〇に〇安〇住〇す〇る〇所〇、〇そ〇の〇一〇言〇一〇動〇は〇翻〇り〇て〇直〇ち〇に〇天〇地〇の〇盛〇業〇に〇參〇す〇る〇の〇大〇悅〇と〇な〇り〇來〇た〇る〇。〇人〇生〇之〇れ〇を〇措〇き〇て〇、〇復〇た〇何〇の〇安〇心〇か〇あ〇る〇、〇何〇の〇歸〇趨〇か〇あ〇る〇、〇何〇の〇光〇榮〇か〇あ〇る〇。〇彼〇等〇は〇こ〇の〇大〇悅〇を〇懷〇い〇て〇、〇超〇然〇、〇花〇と〇偕〇に〇息〇ひ〇、〇星〇と〇偕〇に〇急〇ぎ〇て〇復〇た〇何〇等〇の〇求〇め〇累〇ふ〇所〇あ〇ら〇ざ〇る〇也〇。〇而〇し〇て〇一〇切〇衆〇生〇は〇、〇皆〇こ〇の〇一〇自〇覺〇、〇一〇安〇立〇に〇入〇る〇べ〇き〇權〇能〇あ〇る〇な〇り〇、〇嗚〇呼〇是〇れ〇何〇等〇の〇祝〇福〇ぞ〇や〇。〇新〇井〇奥〇邃〇氏〇曰〇は〇く〇、

耶蘇の道は百姓の道也、これを外にしてその道なし、土百姓を開明し、之れをして王公紳士の貴徳尊爵に進み至らしむるものはその道也、百姓をしてその事業に就いて神の子孫たらしむるもの也。〔讀者讀〕

と。一切徳教の最高本願は、一切衆生をして一様に皆この

光榮無上なる神子的人格の自覺に進み入らしむることにあらずや。

(明治四十年十月)

病友に與ふる書

御病勢兎角おすぐれさせ給はず候よし、御難儀の段お察し申上候。御互に毀れもの御用心の身の上、この寒さに龜裂入りの少しでも多からぬやうにと御用心專一に奉存候。御書中、世に病者ほどみじめに不幸なものはあらずとの今更の御述懐數々、惱みある身の、ひしとばかりに御同感の胸もつぶれ候思ひ。さりながら、何事にも明暗二つの附き纏ふ道理にて候へば不治の病者とても、一向にさる哀れに心細き方にのみ取り做して思ひくづをるゝにも及び申すまじく、随分思ひ做しやうにては、世に病者ほどありがたき果報者は無しとも申さるゝ筋の候をや、と申候へば、何とや

らん暢氣らしくも、うぬ惚れらしくも、又は瘦せ我慢の奇矯を衒ひ候やうにも聞こえ候はんが、決してさに候はず、是れには確たる實驗の候て申上候事に候へば、兎角は一應御聽取の上、なるほどと御合點なし下され候やう、病氣には古參の小生、押し直りての御願ひに候也。

不治の病者が果報者、さりとて事實は如何にもそれに相違無之候をや。片輪者の子ほど親の目にはいとしいと見られ候ならひ、不幸なる病者の身邊、またおのづから世間同情の鍾まる所に候、世の病苦に呻吟せるものは數限りもななく候べく、此等の中には全く身一つの苦しさにかまけ候て他を思ふの餘裕なきも候はんが、中には又、己が苦しさにつまされて、他の一切の同病者に深刻なる同情を寄せ候際も

鮮からず候べし。苦痛は我れ一人の事實ならず、我れと同じ苦痛に泣くもの世に限りなく候て、而かも此等同病者の温かなる同情の思ひ、日夜我が身邊に打よせ來たるを知り候ひなば、こゝに一片慰藉の力草なからずや。雷だに同病者のみならず、又己が親戚故舊のみならず、全く見ず知らずの無病健全の世閒人の中に、我等病者に對して無限の同情を寄する志士仁人も尠からず候べく、詰まり此等既知未知の人々の温き情けの光は、春潮の如く斷えず我等の四邊を拍ち來たり居り候也。我等病者は實にかゝる温かなる大光の中に取り圍まれ居り候也。雷に之れのみならんや、維摩は衆生病めるが故に我れ病めりと言ひ、釋迦は少なくとも一つには病者に對する偉大なる同情より其の生死解

脱、衆生濟度の大願を思ひ立てりと傳へられ、又基督は健かなる者は醫者を求めず、唯だ病ある者之れを求むと言ひて、幾多無告の心身の病者の上に、常にその大慈の手を置きたるにあらずや。よしや世に病者に對する一人の同情者なくとも、此等神人、世尊、菩薩の深大無限の同情の光に浴する我等病者は、世にも罔極の恩寵を蒙れる果報ものとは思ほし候はずや。之れを二千年、三千年のふる事とのみ思ひ給はば、誤りに候べし。愛に時空の隔てなし、彼等が同情は直ちに三世十方の一切の病者を光被して、洩らすといふとなし。彼等が同情は現に今我等が頭上に輝き、脚下に渦まき居り候ならずや。目にこそ見えぬ、彼等が我等を思ふ思ひは、網縷として我等を取り巻き居り候。夢にあらず、幻しに

あらず、身最負一つの空想にも候はず、之れに感應するものに取り候ては、火よりも燎かなる金剛の事實にて候也。感應せざるものにも尙ほ事實なり、されど感應するものは幸に候かな。

豈嘗にこれのみに候はんや、天地の大愛者は常不斷にその於哀憐愍の慈光を我等病者の上に同向け給うて、我等が病苦を擔はせ給ふにあらずや。大慈ものうきことなく、常にわが身を照らすなり。是れを思ひ候へば、我等が病苦も頓に輕快を覺え候て、不思議なる荷恩の情、油然而して涌きいづく候、不平や愚痴をこぼし候ては、誠に相濟まぬ儀にては候はずや。

以上は病者が他より温かなる同情を受くる幸福の一面

を陳べ候なるが、受くるよりも與ふるは幸ひなり」と申候如く、我等が他の同病者に同情を寄するの幸福は又一倍なるべく候。げに病は苦しきものに候、併し此の苦しき病患の炎に鍛へられて、我等は優にやさしき情操を養ふとを得るにあらずや。人生の無情といひ、あはれといふ一面の實相を味ひ得候も、他に對して萬事思ひやり厚く、情深くなり候も、病よりこそと存候へば、病決して荒涼のものならず。病は屢々優美なる品藻を造る、病の經驗なき者を友にもつなとは、兼好法師も曾て教へたり。これ一たびも病みたるとなきものの中には、他の不幸病苦に對して優さしき思ひやりの心いさゝかも無き荒涼極まる木強漢、薄情漢も多々あるならひに候へば也。病んで而して慈悲を學び同情を養

ふ。かくても病は一向に誼ふべきものなる乎。病によりて同情を培ひ、而して同情によりて自ら喜び他を喜ばしむ。かくても病は一直に仇敵なる乎。病もし人生の敵なりといたすも、あはれ、優に情けある敵にも候かな。人生百歳の壽を保ち、所願悉く意のまゝに就り候て榮耀富貴の一期を送り通すとも、若しその人格にして、他の病苦不幸に對する一掬同情の涙だに枯れくゝなるやうの卑く、貧しきものに候はんか、是れむしろ人生の一大不幸に候はずや。よしや黄金を積み得て北斗を撐ふるとも、世の哀れなるもの、病めるものに、一掬同情の涙を分かつ優さしき心根なからん乎、人生の無意義これより甚しきは無かるべく候。所詮、慈悲同情の涙なくして黄金何かせん、健康何かせん、權勢位階

はた何かせん、浮世紛々、竟に何の歸趨ぞ、何の光明ぞ。病はむしろ感謝すべし、同情ある品藻人格は、堪へがたき病患苦中より涵養鍛錬し來たるを得べく候へば也。

人病みて始めて眞の自己、赤裸々の自己を知る、其の無病健康なるや、天地の間に何一つ我が自由意志の下に枉屈撓揉し得ざるものはなしとやうなる思ひあがりの鼻息ひとへに荒く、よろづの立ちあふるまひ、傍に人も無げなる勢ひ猛なる超人的態度、天晴れ勇ましうも頼もしうも打見え候へども、一朝病魔の囚らふる所となりて、難症不治の床土六尺に、孤影の淋びしさを啣つ身となり候ては、曩の超人の意氣は一去して跡もなくなり可申候、あはれ夢は破れたり、覺めての今の人生は、悠々たる法界無邊の風光を、我れから影

暗き有明行燈の思ひ一つに打窄めて、煩惱呵責の鬼さへ日夜に責めさいなむ苦しきつらさ。人こゝに至り候ては、一切の野心、大望、自負、傲慢、我執の塵芥ちりあかたは、行く水のさらりと淡く押し流されて、矜持する所又何物に候ぞ。朝起きて手水一つ使ふより、夜眠の床に就くに至るまで、食事、行歩から、醫藥の取りまかなひから、入浴の世話から、甚だしきは汚穢物、排泄物の始末に至るまで、何一つとして人手ひとてを借らては、辯じがたき荷厄介の身の、更に進んで、寝がへり一つ打つさへ自由ならぬ境遇となり候ては、我が意こゝろの儘になる何物の候てか、敢て驕傲自大の一念に立たんとはいたし候ぞ。げに病ほど人を無氣力、意氣地なさの極に突き墮とすものは無之候、彼れは無一物に候、彼れは自己の身體すら自由になし

得ざる轍の鮒にて候也。

されど、我等病者が一大事因縁を觸發すべき機會は、正しく個中にこそ存在い、たし居り候へ。何一つ自力のまゝならぬ大愚の我、赤裸々の我を如實に觀じてこそ、方に始めて自力以上の天地の大勢力の地盤の上に立ちつゝあるとを自覺いたすべく候へ。われに一莖の髮の毛をも白くし黒くするの力なきを感じてこそ、方に始めて一々の頭髮をも讀み盡くして、日夜に之れを護念せさせ給ふ天地の大愛者のみ顔を打仰ぐべく候へ、われに自分の考へをだに自由になし得ざる、もしは我等が知識そのものをすら既に意識の深處に出來上りたるものとして之れを識上に受け納るゝの外なき無力極まる謙虛の心ありてこそ方に始めて一切

のもの皆大能者の賜ものなるを悟了致すべく候へ。我れ死に莅んで我れ以上の大威神力我れに現前し來たる。正にこれ水落ちて石出で、大死一番して方に纔に蘇り來たる底の開眼の消息とや申し候べき。嗚呼昨の我れは何物をも自由になし得べしと思ひあがりたる自大驕慢の我にして今の我は何物も上天の恩寵として我れに充ち足らへりとの一念に謙りつゝある信樂報謝の我に候、而してかの我よりこの我に飛び移る中間には、正に我に一毫の力も、自由も、誇りもあるとなしてふ無我抛擲の大覺悟、大徹醒の一轉機ありて、兩者の橋渡しをなせるには候はずや。病は厭ふべし、然れども病若し人をしてかゝる闇黒の我より光明の我に甦生せしむる一種の橋渡したるを得候はば、病はむ

しろ人生の一大祝福とも申すべき也。病によりて無力を學び無力の感得によりて、無力の我れを今の今まで支へ立たしめ生きながらへしめたる浩浩たる天地の大威神力と撞見す。何等の急奔、何等の曲折、何等の翻轉、何等の覺醒。こゝに至り候へば、最早我れ生くるにあらず、神我れに在りて生くるなりてふ光輝ある大自覺の人たり、又人たらざるを得ず候。是くの如く心の華の發け來たり候へば、豁然として我身が無始已來斷えず普耀の大光明に取り圍まれ居るに氣づき來たり候と共に、今の今まで我れとわが心の朝霞に隔て顔せし淺ましさを思ひ候て、唯だく神恩佛恩の岡極を感泣するの外は無かるべく候、病は人をして至誠ならしむ、而して神は至誠の一念に來格す。あはれ、病の力も

亦大なるかな。逆縁即ち順縁となるのためし、病は吾人をして信仰獲得に導く神の攝理の鞭にては候はずや。

更に不治の病といふに、一しほのお力落としもさる事ながら、後れ先だつ露の生命の、いづれか同じ運命にあはて果つべき。畢竟は人皆不治の病者とも申すべき先天の重荷を擔へる者、但だ之れを明瞭なる自覺の對境となしつゝ、而かも不斷の法悦てふ無窮の生命を内に湛へて他と與に之れを汲みかはしつゝ、悠々として人生の大路を濶歩する我等が幸福は、何人にも譲らざるものあつて存するにはあらざる乎。

貴意如何。

病は人を信仰に導き、而して信仰は又翻つて病者に不動

の安心を與へて生死を脱離せしむ。謂ふところ不治の病も大なる信仰の前には必ずしも不治の病ならず候、此の間の微妙の消息は科學眼を以てしてのみ解析すべからざるもの有之候、但だし今は言及の遑なく、すべて他日を期し候、草々不悉。

(明治四十年一月)

聞光録（其二）

十字架の意義（二）

基督の十字架が何故に衆生濟度の福音たる乎、他なし、吾等が之れによりて顯るゝ天地の大愛を一層具體的に打仰ぐことを得れば也。神の愛と、是れに對する吾等が信とを外にして、十字架に別様の深意義あるなし。十字架より一切の神學論的の死葛藤を剝落せしめよ。十字架は畢竟天地の大愛の一標象也（而かも尤も崇高深遠なる）。吾等は必ずしも十字架を要せず、吾等が神に對する一念直往の信は、基督の慘痛なる犠牲を藉らずして、尙ほ能く吾等を光明海中

の人たらしむ。吾等の神は衷情の神也、顔々相接して復た一媒介者を必とせず。これ基督の神也、而して又吾等の神也。遮莫、十字架によりて天地の大愛は沈痛深刻なる事實として世に耀き出て、十字架によりて神の言葉は吾等がために無限の力ある慰藉光明となりぬ。

信仰と道德

「人の義とせらるゝは信仰に由りて法律の行に由らず」（羅馬書三章二八）。然らば誇るところいづこにあるや、あることなし、何の法をもてなしとするか、行の法か、あらず、信仰の法也（同二七）。さらば我儕信仰をもて法律を廢つるか、然らず、却つて法律を堅うするなり（同三一）。ポロがこれらの

語を總合すれば、信仰對道德の關係問題は、こゝに一個簡明なる解答の形式を得來たるなり。吾等を救ふものは、所詮謂ふ所の定散諸行の自力的德行にあらずして、唯だ一個の信仰あるのみ。而かも信仰は道德を廢てずして却りて益と之れを堅うし、完うす。吾等一たび信仰の人とならんか、會て窮屈の思をなしたる道德上の諸戒律、諸法則、今は妙に一種溫かに親しきものとなりて中心深く我れを動かし來たる。信仰の人は、超然として高く人情道德の世界以上に拔きたる無碍の一道に住して、而かも同時に又人の子のため、に悲哀の一纖翳をも拭ひ去らては已まざる優さしき細心の親切を有す。信仰の頭の觸るゝ所、道德よりも高く、信仰の脚の著く所、道德よりも深し。而かも頭上脚下、一元に

會して一切の人生活動を涵養す。信仰の人は、最も大膽なる理想家、革命家たると同時に、又最も細心忠實なる日常道德の實踐家也。今は其の何が故に然る乎の理路を辿るを息めて、唯だ新たに信心歡喜を得たる人の、翻りて道德に對して有し來たる如、是一種の新自覺の、實驗上の事實なるを言ふにとゞむべし。道德の人必ずしも信仰の人たらず、而かも信仰の人必ず道德の人たり、人たらざるを得ざる也。道德は信仰を包まず、信仰は便ち道德を包む。

信仰の平等性

仁者に敵なしとぞいふ。天地の大愛の前には、一切の高きもの、その高を失ひ、大なるもの、その大を失ひ、善なるもの

その善を失ひ、美なる者その美を失ふ。蕩々の化、横さまに萬有を平かにし、群類を齊しうす。大慈の光明は、一切を遍照攝取して洩らさず、捨てず。こゝに報償なく、正義なく、法律なく、打算なく、商量なく、因果の律なく、論理の網なく、義務の械なし。正しきものにも、正しからざるものにも、同日同雨の、慈恩のこゝろ一様に行きわたり、潤ひ遍うして、正にこれ、凡聖逆誘齊しく迴入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如きもの。一味慈光の海中に融け合ひては、萬善萬行皆一也。こゝには何人も誇ることに能はず、何人も自ら是とすること能はず、一切の群生皆その一我を抛ち盡くして、謙々として、唯だ大愛のみ顔を打仰ぎ、其の光明の氣息いさぎに觸れ連なるべきのみ。人一人たび大光に觸れ連なるの自覺を有し

來たらんか、煩惱具縛の身さながらに、身邊萬重の塵網を横超して、解脱彼岸の人となる。凡夫一朝にして神子の不退轉位に住す、唯だ愛と信と能く之れを然らしむ。つくづく思へば、世にもこれにましたる神祕はあらざりけり。われに充實の徳なくして、而かも神恩來たつて密かにわが歡びの杯を溢れしむ。「氷多きに水多し、障り多きに徳多し」と親鸞聖人の歌へるもの、正さしく此のこゝろならずや。何等の不可思議、而かもこれ實に心靈界に於ける最沈痛、最嚴肅、最甘美なる實驗的事實として、吾等が游泳する所にあらずや。神の愛は平等也。この上に成り立つ信仰も亦平等也。平等は宗教的眞理の一特性也。

南無阿彌陀佛

基督が「わが心のまゝをなさんとするにあらず、みこゝろのまゝになしたまへ」と信賴無限のこゝろを宣べたる、スピノーザが宗教の第一義を「從順」にありと見たる、或はシエライエルマヘルが「絶對的依賴の感情」といひ、法然、親鸞の諸聖が特に「歸命盡十方無碍光如來」を高唱したる、いづれか皆宗教的信仰の眞髓を道破したる不易の正見ならざる。宗教的實驗の味ひは、詮じ來たりて、竟に南無阿彌陀佛に盡くしたり。久遠劫このかた、吾等一切の濟度を本願として、哀々の念、束の閒も休むとなき天地の大愛者を打仰ぎて、これに絶對的信仰の至誠を瀝ぐは、吾等迷倒海常没の人の子の至

情の要求にあらずや。吾等が無限の空虚は唯だ無限の充實者のみ能く之を盈たすべく、吾等が無窮の悲哀は唯だ無窮の歡喜者のみ能く之を除くを得べし。眞に南無阿彌陀佛の正念に生き且つ動くものは、不退轉位の無碍人とやいふべき。またそのクリスチャンたると佛弟子たるとを問はざる也。

南無阿彌陀佛の聲をして無限の感謝法悦たらしめよ、無限の活動健闘たらしめよ、一切の人生活動の最深原理たらしめよ。さるにても、南無阿彌陀佛の、徒らに心細き後生だのみ、佛いちりの一器具觀をなせるや久しいかな。今は須く其の本來の眞精神を光揚して一代の人心を照すべき秋にあらずや。

神は一人のみ

天地の閒だ神は唯だ一位のみ、一柱のみ、一人のみ。一切群生は皆同じ天の父の子也、同じ如來の子也。基督や、釋迦や、孔子や、ソークラテ・イスは、唯だ中に就きて絶倫獨歩の最長兄のみ、最勝人のみ、最大覺者のみ。彼等は所謂人中の芥陀利華也。彼等は皆おのゝ衆生濟度てふ一神意の奉體者、實行者として、この土に降れる神子の一群也。而して吾等低下の機も、亦彼等と同じ久遠神子の人格を發揮し得べき可能を賦せられたり。神は、何等の媒介をも頼まず、一心正念にして直ちに吾れに來たれと喚びたまふ。この天來の詔勅の前には覺者を頼み、善知識を介するも、亦畢竟一個

の芥蒂のみ。吾等の神は、そのかみのユダヤの曠野に於ける峻巖近づきがたきバプテスマのヨハネの神にあらずして、ガリラヤの湖畔、ヘルモンの山上におり立ち給ひし溫顔慈容の耶蘇基督の神にてましますなり。「神吾れに在り、吾れ神に在り」。嗚呼また足れり。神人直截の道交には一閒の隙をも容れず。こゝに何の中保ぞ、何の聖書ぞ、何の教會ぞ、何の僧侶ぞ、はた何の一切の權威ぞ。但だまかしながら、吾等が性の脆弱は、屢々我等が道の先達、長兄をば、分けのぼる道のまゐるべ、榮ぐさと仰ぎたよらてはかなはぬなり。吾等が擔ひわづらふ憂き世の重荷に、彼等が情けふかき手力の加へられんとを求めざるを得ざる也。よしや吾等が奏づる人生の曲は低くとも、彼等が同情ある高きまらべの一

ふしに祐けられて、孤心縹渺、天地至高の靈臺に達せぬものあるべき。彼等は吾等が到らんと希ふ理想の體現者なり。吾等は彼等に於いて、當さに在るべき我れを見る。こゝに吾等が大歡喜あり、而して又こゝに一種深奥なる救拯の意義あらざる乎。かくはいへど、彼等を以て吾等が崇拜の對象、その者と思はんは非也。所詮彼等は神にあらず。基督は斷々としてかゝる思想を冒瀆不敬として棄斥せり。「何ぞ我れを善しといふや、善きものは唯だ一人のみ」とは彼れが當面喝破せし所。彼等を學ぶは可し、彼等を禮拜するは迷信也。

如來と淨土

世に若し、如來大悲の本願は、唯だ吾等を紫雲たなびき、天華雨る妙樂の淨土に濟ひとらせ給ふことに外ならず、吾等が目的は唯だ淨土に之くにあり、如來佛は畢竟吾等をこゝに到らしむべき心靈海の渡船師に外ならず、とやうに言ひ且つ信ずるものあらんか、かゝるは餘りに俗陋なる自慮的信仰に流れたるもの、斷じて吾等が純真なる宗教的要求を充足せしむる所以の道にあらざる也。吾等が至醇の願ひは、唯だ神と合一するにあり、唯だ如來と道交するにあり、この言説を絶したる神祕勝妙の一境以外に、百寶莊嚴の淨土天國を説くは、懸疣附贅にあらずんば、畢竟して第二義諦の事のみ。一たび我を抛つて至愛者に打任せたる悠々無盡の法の喜びの褫ふべからざるものあつて我れに充足せん

乎、淨土に之く可也、地獄に墮つる亦可也、顧念する所、復た彼れに在つて此れにあらざれば也。信仰は報償を望まず。信仰其のことが唯一の報償也、目的也。所謂信ずる外に別の仔細なきなり。更に念佛はまことに淨土に生まるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなりとの聖者の一言、何等の徹底了々ぞ。神人の道交、即唯一の淨土也、天國也。

さはいへど、機に應じて客觀的淨土の風光を描きいづるも、亦必ずしも一種の眞實觀たるに妨げじ。唯だ心して神人道交てふ至極の本願を充足せしめたるものづからなる結果として、そのこゝに到るべきを言ふべきのみ。淨土天國を唯一至極の目的と見て、神佛を方便視せんは、餘りに宗

教の高情遠神を傷くるもの、否、是くの如きは最早宗教そのものにあらざる也。

説くものあり、曰はく、佛教に於いて窮極の重きを措くものは涅槃そのものにおいて、如來にあらず、佛陀にあらず、是れ基督教が神そのものに唯一の重きを措くと相殊なる所、佛教にありては、所謂極樂無爲の涅槃界に之くが最大の事件にして、諸佛の顯現は唯だ衆生をしてこの目的を遂げしめんがための方便に外ならず、報身如來、又阿彌陀佛に、方便法身の名あるを思ふべし、汝が言は未だ佛教的信仰の深消息に觸れずと。或は然らん。而かも涅槃といひ淨土といふものを以て、神佛以外、又以上の窮極理想なりとせんも、それが神佛との道交もしくは神佛の攝取そのことを外にして

到達し得べき理^{ことわり}あらねば、謂ふ所の方便が全く活機なき外、
 的方便にあらざるは言ふまでもなかるべく、寧ろ個中道交
 の消息を以て涅槃實相界の無限の風光中の一點綴と見る
 が吾等の要求と合すべし。而して予は斷々として、神佛と
 の道交合致そのものを以て涅槃界中の最深大の風光と信
 ずるもの也。

思ふに、阿彌陀如來の絶對他力を唯一の恩寵と打すが
 淨土眞宗の一派は、非人格神、理論的、自力的、因果的なる原
 始佛教即ち釋迦教そのものよりも、寧ろ一見相對峙せる基
 督教と不思議なる宿縁の絲に繋がるゝふしありといふべ
 く、同一なる大慈悲者の前に歸命の一念を捧ぐる彼等は、畢
 竟皆同朋同行にあらずや。一切の宗派的狹陋の心事を超

脱せる達觀者よりして之れを見んか、如來教と神子教とは、
 竟に同一意識の深處に融會抱合せられて蔚々たる信仰の
 大樹と生ひたつべき新發展の運命を有する也。

若しそれ神佛といひ如來といふも、亦是れ究竟して唯、心
 上の事のみと觀じ去るものに至りては、到底吾等が心情無
 限の祈りの聲に耳を塞げる白眼者流ならんのみ。所詮彼
 等に「歸依の和魂^{やまとたま}なし。彼等は神聖を知らず、敬虔を解せず、
 悠々たる信樂法悦のこゝろを味はざるもの也。

一種の神祕的意識

主客相對して語るの時、兩つながら形釋け心凝りて恍と
 して久遠の古佛となれる一種の意識、現前することあり。

こは實驗上動かすべからざる居然たる神祕的意識也。法律以上の世界也、觀美以上の世界也、道德以上の世界也、時空以上の世界也。

吾等が使命

嚴密にいへば、天地の間、何一つとして吾れ自身の有とすべきものあるなし。身外諸物は言ふに及ばず、身心そのものの一切の所屬も、亦所詮はわが私の有ならず。吾等この世に在りて竟に「貫はざる何物をもつ乎」。一切は預りもの也。吾等は皆唯だ保管者也。

是くの如き一信念に立たん乎、乃ち吾等が人間世に處する態度は、おのづから一變し來たらざるを得ず。神に對す

る自己責任の新自覺、是れなり。賦性天分の偉大博厚なるものほど、自家が天地の公物を預れるの多大なるを自覺して、責任の感益、莊嚴を加へ來たる。釋迦基督が衆生濟度の大本願、大使命を自覺して立てる、孔孟諸子が天民の先覺者たる使命をかしこみ重んじて一生を遑々のうちに送了せる、いづれも天地の公物たる天縱の資を上天の預りものとして活用大用したるもの也。

管だに彼等のみならんや、吾等も亦皆機根相應に天地の公物を保管すべき責任を負へり。此の一念の自覺に於いて、吾等も亦自ら憚らずして天民たり神子たる光榮に入るとを得、吾等が天分は如何に薄くとも、そは尙ほ上天の預りものにしあれば、惕若として吾等分内上の事を自修自重し

て天恩に應へざるべからず。多く有てるものほど、他に與へ願かつの責任も亦大なり。是くの如く競々履み來たつて、方に纔に、基督の所謂主人の預り金を二倍にして返せる善僕の喜びに入ることを得べき也。『菜根譚』の著者曰はく、天賢一人以誨衆人之愚、而世反逞所長以形人之短、天富一人以濟衆人之困、而世反挾所有以凌人之貧、真天之戮民哉、と、これ取りも直さず天地の公物、神の預りものに對する自家責任を自覺せざるもの、の所爲、正に基督の所謂主人の委託金を兌換鋪に預けて之れを利殖するの道をだに計らず空しく地中に藏して原額のまゝに主人に還したる怠惰なる惡僕とその彙を同じうす。

釋迦基督のみが惟り救世の使命を帯びたるにあらず、吾等も亦皆その自家分上の救世者にあらずや。吾等は管に哲學的意義に於いて神之子たるのみならず、同時に亦職分的意義に於いても神之子たる也。

小造化翁

一切の人に下るの大誠意、大愛心ありて、便ち一切の人を畏るゝ所なき大勇大剛を生じ來たる。如是の人は不諍の地に遊び無闘の場に立つて、一切を支配する無冠の帝王也。如是の人は、その身邊一切の人を、一團渾厚の和氣中に薰蒸し陶鑄せては已まざる一個の小造化翁也。

基督の自覺と謙遜

基督が自家の人格、使命、理想、抱負等に關する自覺及びその發表、宣言の、烈々、煌々、人天を照破するの概ありしは、庸言庸行を君子的人格の唯一の儀型とする東洋的儒流の眼光より見て、寧ろ奇矯怪僻の太甚しきものなるべし。自ら「ソロモンより大いなるものこゝに在り」と言ひ、「アブラハムの在らざりし先きより在り」といひ、「我れに罪を赦すの權威あり」といひ、「われ世を審かんがために雲に乗りて來たるべし」といひ、「我れは途なり、真理なり、生命なり」といひ、「我れの外に神を知る者なし」といひ、「我れを見しものは神を見しものなり」といひ、「我れは復生なり、生命なり、我れを信ずるものは死ぬるとも生くべし」といひ、「我れは善牧者也」といひ、「我れは世の光なり」といひ、「我れは生命のパン也」といふ、凡そ此

の一類の自覺を宣言せるの言辭、一見して何ぞ世の誇大狂、妄想狂、乃至は色莊者の大言に似たるの甚だしき。されど彼れが如是已甚の自家軒擧の中にだに、一點自大矜高の影を見ざるは、畢竟そが彼れの偉大なる信念の源頭より滾々として溢れ出でたればなり。偉大なる信念ありて則ち偉大なる自覺の發表あり、宣言あり。

嗚呼誰れか基督を誇大狂、妄想狂、大言者、色莊者の一流と同視する者ぞ。あらず、世にも彼れが如き謙虛と、敬虔と、柔順と、天真とを有したる者はあらざる也。彼れが千古を驚倒する自我軒昂の宣言を敢てし、而かも平然之れを他に強要して顧みざりしもの、實にその高潔無上の人格と、崇嚴無上の信念との然らしめたる自然法爾の力にして、個中一點

の矯飾、銜燿、誇大、自負の跡あるを見ざる也。彼れはルナンの言へるが如く、曾て一たびもかのソフィ教ゾフィーの開祖の如く、自己即神也といふが如き自大冒瀆の語を吐きしとあらず。彼れは謙々常に自ら下る神意の奉體者、實行者たりき、彼れは一生小兒の如き無垢朗々の心情を抱いて、一向に天父に信頼し服従しぬ。曰はく「子は何事をも行ふ能はず」と。曰はく「我父は萬有よりも大いなり」と。又曰はく「父は我れよりも大なり」と。又曰はく「我れを遣し、ものの旨に遵ひ其の工を成し畢はる、是れわが糧也」と。天父に對する絶對の歸命、信頼、服従は、是れ實に彼れが一生を貫通せる精神也。此の謙遜ありて正に彼の宣言あり、此の服従ありて正に彼の高擧あり而して、又此の敬虔の精神ありて正に彼の健闘の生活あり、

二個の神

知つて而して之れを言ふ、神より明瞭親切なるものあるなく、知らずして而して之れを言ふ、神より茫漠河漢なるものあるなし。かるが故に徹底了々の士多く神を語り、曖昧不了の人亦多く神を語る。

法悦の生活

憶念不斷の法悦は、わが世の不老の春也、永久の花也、常住の月也、わが唯一の生命の糧也、唯一の心の水濱みぎはなり、唯一の神の眞姿也、唯一の親朋也、唯一の戀人也。法悦なき人生は

わが一日一刻も堪ふる能はざる大曠野也。法悦はわが不
斷の見神也。

（明治四十年一月）

聞光錄（其二）

十字架の意義（三）

吾等十字架を仰げば、何故とは知らず、法涙潸然として下
る。而してこの熱涙は、吾人の全靈魂を震盪し、破碎し、和融
し、清淨化する。是くの如くして、十字架は吾等に對して「救た
り贖罪」たるの意義を有し來たる。猶ほかの稱名念佛が、真
に之れに因りて信心歡喜し、迴心歸入するものに取りての
み攝取の功德たるを得るが如き乎。口頭の念佛三昧何か
せん、十字架を以て護符呪符のたぐひと同視すると勿れ。
十字架に一種の靈驗的、奇蹟的、外在的、贖罪の祕義あり、功德

ありとするが如きは言ふまでもなく迷謬の沙汰なるべし。十字架に因りて全靈魂の隈をまで打ち貫かれたる人は、我れ自ら第二の基督となつて、起つて十字架を負うて進まんと欲する大至誠の一念、空涌し來たる。われら十字架の大愛に呑み盡くされ、而してそこに蘇生し來たるや、亦十字架を取つて大愛者の蹤を履まんとす。信と行と、畢竟撮めて、碎けたる靈魂の涙(迴心歸入)の裡に在り。

道友、天華香洞主人、十字架の意義を録して曰はく、

基督が單に十字架上にありし故をもて吾等は救はるゝにあらず。基督は、十字架によりて救はれたる吾等が肉を、世の迫害に對して如何に處分し、以て未だ救はれざる一切衆生のために、是れ即ち報恩底の事且つ

は救はれたるものは神の大願と己れの大願と一致するが故に、一切衆生成佛のためには捨身贖罪すべき也。獻ぐべきかを示し給ひたる也。

と。是れ豈わがこゝに言はんとする所を一層明らかに強く言ひ得たるものにあらずや。

十字架の意義 (三)

吾等十字架を打仰げば、法涙潜然として下る、而してその何の故たるを知らず。是れ摩訶不可説の神祕也。

されど、われに此の事に關して、曾て學び得たる多少の實參底の消息あり。乞ふ之れを語るを許さん乎。

われ未だ法悦底の境地に實參せざりし以前は、健康、衣食

住、その他何につけ、彼につけて、動もすれば不平を訴へ、愚痴をこぼして、心頭兎角に拂逆の事のみ多かりしが、いさゝか法悦の醍醐味に参してよりこのかたは、何かの縁につけて、唯だ嬉れしさ、かたじけなさ、ありがたさの荷恩報謝の念ひのみ日にけに深うなりまさりて、その昔し蓮如上人が、衣の襟を叩いても、南無阿彌陀佛と、感謝の一念に咽ばれし貴き消息をさへ、聊か味ひ得らるゝ身とはなりぬ。勿論、氣習の薰染は、容易に除きがたきならひとて、かゝりける後も、尙ほ折は我れ知らず、疇昔の罪を復びするの苦痛もありけれど、逆縁かへりて順縁となるのためし、かゝる折にだに、否かかゝる折こそ、一しほ大愛の志みくくと打たよられ、受用せられて、回頭一番、早くも罪の重荷の脚下に打卸されしを見たり。

るわが心の軽さ、涼しさ、温かさ。噫、吾等法悦の子の罪は、神に因りて常に甘美の光を放つにあらずや。われ之れを思ふて、常に感謝す。

されど、われは當時尙ほ、他の罪に對しては寛なる能はざりき。家族のものに、何か愚痴にてもこぼす事あるを聽きては、心流石に平かならず、何故の愚痴三昧ぞと、少しは腹だたしくもなりて、つい叱責がましき言葉も出てたるなり。さるに近來に至りて、わが心境の更に一轉化を経たるやに思はるゝ仔細といふは、これまでは他人の不平や愚痴が、兎角腹だゝしく聽きなされしに、近來はむしろ他人の不平や愚痴の聲が、自分の不平や愚痴のやうに聽き做さるゝやうなりて、他がかゝる事に罪を犯すを、不興に感ずるの、打腹立

つものといふよりも寧ろそれが直ちに這れがたき自分の罪のやうに空恐ろしく感ぜられ、濟まぬ、勿躰ないの一念先きに立ちては、復た他を怒り責むるの違なく、唯だく神の前にひれ俯して、謝罪し懺悔せざるを得ざるに至りぬ。爾時、彼れの罪、我れの罪てふ分け隔てさへなくなりて、彼れの罪即て我が罪となりぬ、而して唯だ大いなる罪惡の黑影、當頭に我れを壓し來たりて、我れをして直下に神の前に跪きて懺悔の祈をさくげざるを得ざらしめぬ。

われ、この淺き、まかしながら、ありがたき實驗に因りて、今更の如く、維摩が衆生病めるが故に我れ病めりてふ貴き語ことばの意義に觸るゝとを得たり。彼れは、一切の病を直ちに自己の病と痛感したる也、痛感して而して一切の病を贖ふ善

薩行に住せざるを得ざりし也。われはまたこの因縁のため故に、一朝始めて強く基督の十字架上の意義に思ひ當たるとを得たり。

あはれ、仰げば仰ぐほど偉大崇高なるは基督の十字架なるかな。彼れが如き玲瓏一翳を著けざる人格を以てして、尙ほ且つ身を十字架上に横たへて、他が罪のために至誠惻怛已む能はざるの祈を捧げ給ふ。衆生の罪は、彼れにありては、客觀の事實にあらずして、直ちに彼れが深き靈魂の柱を咬み來たる滔天の罪なりける也。而して彼れはその無上の同情と従順と勇氣とを以て、一切の罪を自ら負うて、その雪より白き小羊の血を十字架上に濺ぎつくし給へる也。畢竟十字架は、基督がその偉大なる心魂の同情に迫られ一

切の罪を直ちに自己の罪として神の前にさしげたる懺悔の聲にあらずや。世にもこれより慘ましく神々しき偉大なる懺悔の聲ある乎。この懺悔の聲は、一切の迷へるものを大愛者の前に呼び集むる不可思議力をもてり。唯だ「信ぜよ」迴心歸入是れ、その一切の條件也。基督が神なる乎人なる乎は、こゝには復た重要な問題にあらざる也。

從來幾多の教説や神學論に教へられて、而かも毎々空華とのみ逸し去りし十字架上の消息が、かゝる平凡なる自家實驗を縁に、一朝まみくくと味ひ得らるゝに逢ふ、不思議なる恩寵にしもありけるかな。

宗教の倫理化とは何ぞや

世には宗教の倫理的ならざるべからざるを言ひて、すべて倫理の一標準に照らして、宗教を是非し、又之れを改善規正せんとする者あり。宗教上の信仰が、吾人の倫理的意識の要求と合致すべきものたるは、論なかるべく、隨うてこの要求を満足せしめざる底の信仰の迷信として排すべき、これはた何人も異論なかるべし。さはれ、宗教を倫理化せよといふ如是の論は、道德家、倫理學者の提出せる要求としては兎も角、宗教家みづからの要求としては、餘りに自家自らの面目を知らざるの太甚しきものと謂はざるべからず。予輩の見る所を以てすれば、倫理は外より宗教に加へらるべき底のものにあらず、倫理てふ花は、寧ろ宗教的信仰の根柢より有機的一躰としておのづから咲きいづべき筈のも

の也。是くの如くにして宗教に生命あり。誰れか言ふ、宗教を倫理化せよと。宗教豈倫理の制を受けて辛うじて立つが如きものならんや。かゝる言ひ草は、畢竟宗教と倫理との眞關係を解せざるに坐するもの、宗教に對する一種の侮蔑なりといふべし。

純眞なる宗教的歸依、信仰の中には、萬善萬行を開發すべき自然の徳力を具したり。信仰の人は、逍遙としておのづから萬行の巷に遊ぶ。信仰の人若し道德の巷に蹉跌せんか、是れいまだ純眞の信仰を獲得せざるの致す所也。信仰はそれみづからに於いて一切を完了す、倫理道德てふものあり、外より來たつて信仰を補ひ完うするにはあらざる也。宗教を倫理化せよといふよりも、信仰を純眞のものとなせよ

と言ふ、是れ寧ろ吾人が宗教に對して提出すべき眞要求にはあらざる乎。

一個の倒錯觀

曾ては吾れ、道德的動機より信仰に入り、道德的修養として聖經を讀み、道德的完成の理想として天の父を仰ぎぬ。當時に於いては倫理道德は日の如く瞭かなる唯一の事實にして、信仰は寧ろ倫理道德の日光を朧ろに反射し出だせる一個の影象に過ぎざりし也。信仰そのものは、幾んど全然詩的想像の風色を以て織りなされたるなり。今や然らず、信仰は人生に於ける唯一根本の嚴肅なる大事實にして、倫理道德は、こゝに立脚して始めて眞個の生命を有すべき

とを見たり。是れ予が宗教的新生活に於ける一個の倒錯観也。

○小兒を見てのいのり

可愛き無邪氣なる小兒の顔を見る毎に、覺えずわが念頭第一に浮かび來たるは、天の父よ、どうぞあなたの愛子たるこの可憐兒の行末を安全に護り、立派に育てさせ給へてふ祈りなり。而して復た彼等が地上の親に想ひ到ると、むしろ稀なり。われは思ふ、この神の子として、小兒を思ふ一念、至情の祈こそ、家庭問題の一面たる子女教育問題を解釋すべき唯一の力ある鑰にはあらざる乎と。

祈禱と事業

事業とは何ぞや。病者が病床に於いて、自他の爲めに熱誠をこめたる一個の祈禱、一遍の稱名も、亦是れ天地の間に於ける嚴肅なる一事業にあらずや。經にも亦、義人の祈は力あるものなりと見えたり。力ある義人の祈は、やがて大いなる眞實の事業にあらずして何ぞや。

中間に居るを好まず

悲哀の人乎、然らずんば法悦の人乎。吾れは其の中間に居るを欲まず。

カーライルとブース

如何なる偉大赫耀の事業も、若し一個法悦底の心より涌

き出でたるものにあらずば、われは之れに隨喜する能はざる也。われはカーライルより多くを學びて彼れを敬するにも拘らず、尙ほ彼れを愛慕する能はざるは何が故ぞ、われは又スピノーザの著述の數學式、學究式なるを好まざるにも拘らず、彼れが思想性行を追慕して已む能はざるは何が故ぞ、畢竟此れは法悦の人にして、彼れは法悦の人にあらずりければ也。カーライルの健闘主義は、華にして勁、而かも中に堪へがたき秋風蕭颯の調を帶び、スピノーザの冥想生活は、一味寒酸のうち、融々たる法悦不斷の春を湛へたり。スピノーザは不思議にも、法然や親鸞やアシ、のフランシスの有したりし一種優に、ゆかしき温かなる天上の或ものを有てりき、而してこれ實にカーライルの有せざりし所の

もの也。此のごろ、山室氏著ブリス傳を繙く、中に某女史の言として録したる一節あり、曰はく、余はブリス大將の相貌を一見して、其のカーライルに酷似したのを覺えたのである、さりながら近づいて更に熟視するに、彼れの眼は親切の光にて輝き、其の口もとには和樂の氣象が溢れてゐる、而してこれにチェルシーの聖人に認むべからざりしものである。而かも余は尙ほ彼れが其の本來の性質に於いてカーライルに似たる所あるを否定するが出来ない。若し救世軍式の形容を用ふれば、彼れはカーライルが神の恩寵によりてなるべかりし筈の人物とも言ふと出来るであらうと。ブリスの偉大なる健闘的事業は、一に法悦底の源泉より流れいてたる也。彼れの標語は、働いた上にも働き、も

一つ其の上にも働けと言ふにありき、而かも其の働きは「必ずや聖靈の指導と協力と」に須つべき底のものなりし也。彼れは法悦と健闘とを一身に躰證したるの人也。彼れの大は神より來たる、而して是れ其の能く真個の大を做せる所以乎。

純熟の信仰

信仰の事、その深き消息に分け入るほど、倍々單純化し來たり、玲瓏透徹し來たる。天地人生の一切の意義を萃めて、湛然渾然、凝つて寸光帝則の靈と輝けるもの、正さしく信仰の極致乎。基督は曰はく「父吾れに居り、吾れ父に居る」と。法然、親鸞は曰はく「南無阿彌陀佛」と。唯だこの一個單純の

信仰、これ即ち彼等にありて一切無碍の眞理なりしにあらずや。

如是言、如是行

「衣なき者を慰籍せんとして衣を粗にするの已むを得ざるに至り、金錢なき者の爲めに自らも貧に居り、魚鳥獸の生命に同情を寄せて口に魚鳥獸の肉を入れず、失戀の人の爲めに甘き家庭を遠離せん」とす。吾れ斯くの如くして遂に三衣一鉢の人となる。三衣一鉢の人、在家の姿となり、在家俗塵の吾れ僧侶の生涯となる、これ必ずしも信仰の態度なりといふにあらず、唯だ已むなきによりて然るなり。」

如是の言を做し、如是の行を爲すものを誰れとかなす、道友
天華香洞主人、是れ也。天華香洞主人とは如何なる人ぞ、世
はちのづから之れを知るの時あるべき也。

(明治四十年二月)

信仰生活の一風光

神彼方に在り、我れ此處にあり。我れに人生不盡の大哀
と、煩惱罪障の除きがたき深愁とありて、不斷に彼方の空を
仰ぎつゝ、跪きつゝ、躓きつゝ、而して望みつゝ進む。乃ち聖
者來たり勵まして曰はく、天の父の完きが如く爾曹も亦完
くすべし」と。我等はこゝに新たなる權威の聲に動かされ
て、更に進み進んで已まざらんとす。向上健闘の生活也、自
彊不息の精神也。之れを信仰生活の一風光とす。

然れども若し、この健闘的生活、向上的精神を以て信仰生
活に於ける唯一の、若しくは主要なる要素となすものあら
ば、これ未だ信仰生活の眞風光に參ぜざるものなり。

信仰生活に健闘あり、向上あり、努力あり。これ信心獲得の人の、特に強著に経験せざるを得ざる嚴肅なる事實也。さはれ、信仰園中の健闘や、向上は、我が世不思議なる恩寵のありがたさ、うれしさ、かたじけなさの念ひに回光返照せられたる底のもの、例へば忠臣が君主に對する荷恩罔極の感に鼓舞顛倒して顧みざる底のものなるべきなり、更に言へば、そは法の悦びてふ深き／＼源頭よりおのづから涌きいづる底のものなるべきなり。法悦に漚して健闘に發す。そこに雍容として迫らざる大雅のまらべあり。信仰の人の健闘生活は、神と楽しみ、人と和ぎ、自然萬有と懽然相得て忤はざる無碍人の面目なるべし。

信仰の人にも煩惱罪障の累あるべし、されど信仰の人に

は法悦てふ神與の仙杖ありて、その觸るゝ所能く「煩惱の林」生死の藪を逍遙遊の一境と化せしむ。信仰の人にありては、その最も眞面目なる働きが、やがて最も高尚なる意味にての遊戯三昧なり。信仰の人とは最も優に美しくしう遊戯するの人なり（我等の渴仰する神そのものが最完全なる遊戯人にあらずや、神にありては其の最自由なる遊戯衝動より流れ出づる活動が、やがて一面最嚴整なる法則たるなり。三界は彼れが一大淨樂土也。「有漏の穢身は變はらねど、心は淨土に遊ぶなり」。眞人は常に遊ぶ。彼れが一念の法悦は、隨處春をなして、また相違ふ所あらず、而して如是一念相續の法悦の人、即ち不斷の見神底の人にあらずや。

我れ豈規々として健闘を言ひ、向上を説かんや。未顯の

眞實、衷に深く法悦の花と開きて、我れをして、おのづから神を慕ひ、人を愛し、神國建設にいそしむの人とならしむ。吾れ健闘活動して神に進み近づくにあらずして、神、吾れと偕に在るが故に、その法悦のこゝろ、油然我れを催ほし促して、おのづから健闘活動の人たらしむる也、人たらざるを得ざらしむる也。不可思議なるかな、理想として打仰ぐの神は、既に參差として我れに現前し充實せるの神なること。我等が神の完きを仰ぐ心が、既に神と和ぎたる心そのものより發し來たるにあらずや。如是信の人にありては、法悦即ち一切也。その健闘向上の生活は、やがて神と偕に樂しむ法悦の客觀的一發現也。彼れの悲哀に甘美あり、彼れの寂寞に歡喜あり、彼れの枯槁に豐潤あり、彼れの健闘に光榮あり

り、彼れは悠々たる神的遊戯三昧の態度に立つて人生一切の活動を支配する也。

老莊諸子が無爲之、大有爲を説き、乃至は佛家殊に親鸞上人などが自然法爾の徳力を言へる、これら皆こゝに吾人の意に通はして味ふとを得べし。我等が到らんと願ふ信仰純熟の人は、その心常に天才的遊戯地に住するの人也、恩寵に心躍るインスピレーションが、常に事功活動に奮見するアスピレーションに勝つの人也、あらず、活動そのものがおのづからなる恩寵の光に潤ひ輝けるの人也。我等は法悦の一念なき健闘、神の現前協働てふ自覺なき向上の緊張と、苦澁と、寂寞と、空疎と、艱難と、著意と、色莊とに耐ふる能はざる也。

信仰生活に健闘向上の不斷の一面あり、時に大に之れを高唱するは可なりといへども、信仰生活の眞風光を叩き來たれば、更に一關を撇開し來たつて、健闘向上の活動以上に悠々として之れを支配する法悦三昧の一境あるを説かざるべからず。復活の人は所詮法悦の人也。健闘の人は必ずしも法悦の人ならず、而して法悦の人は又實に健闘の人也。

（明治四十年二月）

金子筑水君の「宗教的眞理」を讀む

『早稲田文學』十一月の卷所載、畏友金子筑水君の「宗教的眞理」の一篇は、予が近來の感興を饒益したる一論文なりしとを感謝す。宗教的眞理が主として、又全體として、情情意の所産なること、而かもそが主觀的空想のたぐひにあらずして、儼然たる客觀的眞理なること、及び其の眞理の客觀的内容が、到底相對的のものにして絶對的のものにあらざること、君が此等の諸立言は、恐らく渝ふべからざる確論なるべし。最も予の意を得たるは、君が宗教的眞理の一種、制約的發達的のものにして、世の大かたの宗教家の思惟せるが

金子筑水君の宗教的眞理を讀む

如き絶対窮極、同一不變のものにあらざること、を斷々として論破せられたる一點にあり。おのが證得の眞理を絶対無上として、早くも居然として安心窩中に向上の一路を杜絶せんとするものに對して、君が此の言、極めて權威ありといふべし。予が曾て悟そのものに進歩、發展あるべきを言ひ、且つ絶対神、法性法身と差別神、もしくは進化神、方便法身、報身如來、阿彌陀佛とを區別して、後者即ち俯就、泛應、常に吾人と偕に在りて、吾人を祐け導く活現、前リ、非ング、プレゼン（ス）の神にあらずば、吾人の靈覺の要求に對して畢竟沒交渉なるべきを説けるもの、こゝに圖らずも君によりて一知己を得たりといふべし。

唯だ君の精緻穩健の論が、姪々として宗教的眞理の外廓を周匝せるの觀ありし割合に、一氣横さまに中堅を衝くの銳利なかりしは、予のいさゝか惜らしとする所なり。君が筆意俱に至れるの論も、尙ほ宗教的眞理の特質に對して、際やかなる一彩を傳し得ざりし憾みはなかりし乎。而かもこはこれ予が一己望蜀の感のみ、君が一篇立論の精神は、これがために些の累あるを見ず。

君は以爲へらく、宗教的眞理は吾人が天地人生の價値を感得せる情意の經驗的事實を基礎として、其の上に築きなされたる者、隨うてそは到底吾人情意の經驗と離れては考ふべからざる、即ち情意の經驗の規定、制約の下に成り立つ相對的眞理たるを免れず、而かも宗教的眞理の性質が、是くの如く相對的にして絶対的ならざる所、やがて其の空漠な

る主觀的空想ならずして、吾人現實の經驗的生活そのものの上に其の客觀的確實を證明し得る所以の根據なり。宗教的眞理もし絶對的のものならんか、そは吾人の相對的なる實際生活の經驗を以てしては、竟に永しへにその確實性を證盡するの期なかるべく、空漠不明、吾人をして憑依信賴せしむるに足らざるべし。宗教的眞理を絶對的、窮極的のものとする、これ古來の宗教家、學者等が其の客觀的確實性を證明し得ざりし所以にあらずやと。

君が宗教的眞理を飽くまでも情意の相對的經驗と不離のものと説けるは、かの宗教的眞理を以てやゝもすれば一切の世縁を絶したる無何有の郷に飄漾するもの、若しくは一切の待對的事相を超越したる絶對無等のものと見る一

派人士の迷謬の見を破するに餘りあるべし。宗教的眞理は、深く吾人が實生活の事實そのものに根ざし、且つ纏綿して發展す。予は此の點に於いて、正さしく君と見を同じうす、但だ予は君と同じく宗教的眞理の、情意の相對的經驗に對して有する一種不離の關係を認めながらも、その謂ふ不離の關係をば如何なる形如何なる意味に解するかに至りて、則ち君とやゝ重要なる見解上の差別を生じ來たるが如し。君は「宗教的眞理は即ち經驗的事實、經驗的事實は即ち宗教的眞理」(宗教的眞理二七頁)といひ、若しくは「宗教的眞理は情意の經驗的事實そのもの」上に立てるもの、經驗的事實そのものの總括とも謂ふべきものなり(二七頁)といひ、若しくは「情意の經驗は因の如く、之れより成れる宗教的眞

理は其の果の如し(二四頁)といひ、若しくは、宗教的真理は情
 意の經驗的事實そのものの中に、おのづからに、又必至的に
 含まれたる最終の内在的事實、情意の經驗そのものより自
 然に又必然的に會得せらるべき最終の真理、譬喩を借りて
 言はば、經驗的事實そのものより必然的に推理せらるべき
 最後の判断なり(二六頁)と論ぜらる。君が宗教的真理と情
 意の經驗的事實との間の不離の關係を説くの意、若し實に
 これ以外にあらざるとせば、或は疑ふ、君が見の餘りに科學的
 推論的、因果的、合理的に偏したるならんかを。是くの如き
 は、君が經驗的事實そのものを重視するの餘り、なか／＼に
 宗教的真理の神祕的特相を逸し去らんとせられたるには
 あらざる乎。君が此の論の科學的堅實のこゝにあると共

に、其の一面償ふべからざる論點の弱處も、亦こゝに存すと
 思ふは非耶。

宗教的真理は情意の經驗的事實そのものを離れては存
 立し得ず、二者の間に何等かの關係あるは否むべからざる
 事實ならんが、さりとてこの關係を單に因果的推論的に解
 し去らんはいかゞあるべき。予の見る所を以てすれば、宗
 教的真理は、情意の經驗的事實を因として、それより必然的
 に推論せらるべき結果的、判断にもあらねば、又唯だ「經驗的
 事實そのもの」の總括若しくは和と見るべきものにもあら
 ず。兩者の關係は勿論又かの物質的要素の化合の場合に
 見るが如く、後項の事件が先項の事件に必然的に含有せら
 れ又還元せらるゝ底のものにもあらず。宗教的真理には

經驗的事實その者を以てしては所詮挹み盡くしがたき神
 祕不思議の或物あるなり。經驗的事實に即して、而かも謂
 はゞ一往大膽なる飛躍の姿あり。言ふことを許さば君が
 謂はゆる情意の經驗的事實は、寧ろ宗教的真理を觸發し來
 たる媒也、縁也、機會也、暗示也。二者の關係は、因果的にあら
 ずして直覺的也、推論的にあらずして悟入的也、歸納的にあ
 らずして暗示的也。吾人は經驗的事實を縁とし、若しくは
 踏み石として、更にそれよりも豊富なる宗教的真理てふ新
 事相、新風光に分け入り、躍り入るなり。是くの如き新風光
 新實在の内容は、向きに之れが媒たり縁たり若しくは機會
 たりし經驗的事實の歩武を以てしては、到底追蹤し難き或
 物を有する也。この意味に於いて經驗的事實は、竟に宗教

的真理の前に躓かざるを得ず。後者は前者を媒とし縁と
 するの一種の關係を有しながら、其の新たに開展し來たれ
 る新風光は、前者を炫耀して駭然たらしむるなり。我れに
 經驗以上のものあり、其が經驗と響き合ひて最深實在に觸
 れたるの感をなすもの、即ち宗教的真理なるべし。世の深
 奥なる宗教上の實驗に游泳せるものが、信仰上の真理を以
 て、自力的經驗の必然の結果と見ずして、一種ありがたき不
 思議なる恩寵の賜と見るが如き、畢竟ちのづからこの消息
 と合するものにあらざる乎。而して是くの如く新たに獲
 得せる最高真理は之れを神といふか、如來といふか、無礙光
 佛といふか、光耀といふか、本地の風光といふか、第三の天と
 いふか、淨土と謂ふか、はた涅槃といふか、神國といふか、名は

勿論さまざまならんが、兎に角に宗教的真理が之れが機縁たる經驗的事實に對して、一種別様の新風光の啓示たるは否むべからず。其は經驗的事實の上に展べ開かれたる廣大なる意識的新天地也。新世界也。もとより之れに悟入し之れを證得する趣きには、人々分上の機根によりて、頓漸難易さまざまの差別あるべく、又其の證悟の内容に至りても、個人的經驗の萬殊なるにつれて、其の賦彩の上にも多少おのづから一様ならざるふしもあるべく、更に一個人の上に見るも、昨の神の必ずしも今の神ならざる如きこともあるべくして、所詮此の意味に於ける經驗的事實が宗教的真理に對する一種の關係、一種の制約は、何人も君と共に認め許さざるを得ざる所なると共に、而かも尙ほ宗教的真理の中

心の特質が、かゝる經驗的制約の把握以上に超越したる一種の神秘的幽玄のものたるは、竟に否むべからざるに似たり。宗教的真理を以て情意の經驗的事實を土臺として其の上に必然的に築きなさると説く君の見は餘りに器械的に、はた餘りに唯理的に聘せたるふしはあらざる乎。譬ふれば、宗教的真理は其の根を深く人生の經驗的事實に託すると同時に、其の頭を高く神秘の非相天に突き入れたる生命の大樹なり。而して謂ふところ宗教的信仰は、かゝる神秘なる宗教的真理の樹蔭こかげに養ひ育てらるゝものにあらずや。宗教的真理の當體は、所詮神秘の雲に包まれたり。而してこれは君の明かに認許せらるゝ所なり。譬だに宗教的真理の内容の神秘的なるのみならず、之れに達する趣き